
(仮タイトル) すらいむ?に転生

sin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（仮タイトル）すらいむ？に転生

【Nコード】

N8728X

【作者名】

sin

【あらすじ】

少し冷静で少し器用という没個性な男が異世界に転生する話
ただ、転生した肉体は不定形生物だった。

化物の体になった主人公が蹂躪、勝利、征服の快楽を知り……？

すらいむ？ 転生…… 主人公保持スキル（前書き）

柚木の持つスキルの効果を大雑把かつ簡単に説明。
のちの伏線にしているスキルもあります。

すらいむ？転生……主人公保持スキル

レベルアップボーナス

Level:3

レベルが上がったので吸収効率が上昇しました
触手の操作をしやすくなりました

Level:28

レベルが上がったので触手の操作が自在になりました
固体になることができるようになりました
分裂した個体を自動操縦にできるようになりました

スキル

体液系

- 『体積変化』 体の大きさを変える
- 『体積操作』 体の形を変え、自由に操作する
- 『体液変化』 体液の種類を変える 例：胃酸（初期）↓硫酸（変化）
- 『体液操作』 体液を放出した後、その体液を移動させたりできる
- 『体液濃度操作』 酸の濃度を上げるなどできるようになる
- 『体液性質操作』 粘度や治癒促進などの性質を持つ体液に自由に換えられる

ユニークスキル

- 『異世界からの転生者』 違う理をもって生きる
- 『吸収』 相手の体液を吸ったり、粘膜に接触する事で相手のスキルを得る事ができる
- 『超越』 限界を超えることができる
- 『成長』 変動しないパラメータ（魔力量など）が成長する
- 『触手操作』 触手を操る
- 『精密』 正確に動く事ができる
- 『並列思考』 同時に多数の考えができる
- 『高速処理脳力』 PCのスペックが上がったようなもの
- 『高速思考』 早く結論を出せる
- 『圧縮』 体積を小さく圧縮させる事によって質量を上げる。圧縮した部位は強靱になる
- 『物理無効』 物理的な攻撃の無効化。但し液体の時のみ可能

『分裂』 自分の半分のスペックを持った分体を生み出す。大体成長して自分より強くなる

『擬態』 カメレオンや蛸のように体色を変える

『人型擬態』↓『擬人』 人の形をしているのなら何にでもなれるが能力は吸収しないと使えない。

『フェロモン』 女性を誘惑しやすくなる。常時発動型なのでどうしようもない。リリーはこれにかかったともいえる。

『統率』 群れをまとめるスキル。分体に命令が届きやすい

『俊敏』 素早く動けるようになる。瞬発力や素早さの上昇

『直感』 勘が良くなる

『カリスマ弱』↓『カリスマ中』 人を惹きつけやすくなる。今は慕われやすくなる程度

『良運』 運が良くなる

『王者の威厳』 王の威厳を醸しだすスキル。

『超力』 力が強くなる

『武技の真髄』 武術のコツを掴みやすくなる

『捕獲』 敵をほぼ無傷で捕らえる技術

『調教』 躾をする技術

『守護』 離れた人間でも加護を与える事で護る事ができるようになる」

『冷静』 常時発動型。 常に冷静になる
『沈着』 優先度は冷静の次。 大抵のことでは動じなくなる。

魔法系

『初級強化魔法』 簡単な魔法が打てる
『初級魔法』 ↓ 『中級魔法』 少し高度な魔法。 使えるのは世界にも100人ほど
『初級性魔法』 ↓ 『中級性魔法』 魔物しか覚える事のできない魔法。

『魔力攻撃力増』 魔法の威力が上がる
『解呪』 のろいを解く
『隷属化』 奴隷を作るスキル
『能力付与』 無機物に能力を与える能力

耐性・補正系…… 全て常時発動

『下克上』 自分よりレベルが高い相手と戦うと攻撃力と守備力があがる

『技量上昇』 MAX いろいろな技量上がる。 剣技など
『怪力補正』 ↓ 『剛力補正』 力が強くなる

『刺突補正』 MAX 貫くような攻撃に補正がかかり威力が上がる
『刺突耐性』 ↓ 『刺突半減』 貫くような攻撃を半減する
『衝撃補正』 MAX 叩き付けるような攻撃に補正がかかり威力
が上がる
『衝撃耐性』 ↓ 『衝撃半減』 叩き付けるような攻撃を半減する
『棍術補正』 MAX 棍の扱いが上手くなる
『打撃補正』 MAX 打撃系の攻撃に補正がかかり威力が上がる
『打撃耐性』 ↓ 『打撃半減』 打撃系の攻撃を半減させる
『物理半減』 物理攻撃を半減させる
『全状態異常耐性』 状態異常になりにくい
『光属性魔法耐性』 浄化されにくい
『回復力上昇』 回復がはやい

解析系

『解析者』 性質や能力を解析する
『分析者』 ステータスを分析する
『真理の魔眼』 本質を見抜く魔眼。 真贋を見極めたり、幻覚の
正体を見抜く

職業系

『薬師』 薬草の知識

『言語能力』 あらゆる生物の言語。外国語もできるようになって
いるが、癖で言いづらい

『鍛冶師』 鍛冶の達人として認められたものに与えられる。効果：
より良いものが出来やすい

『魔法使い』 魔法の知識をある程度持ち、使えるものに与えられ
る。効果：魔力量50上昇

『冒険者』 冒険の心構えを持つものに与えられる。効果：東西南
北の向きがどこにいてもわかる

『神官』 神に仕えるものの知識。信仰するものには与えられる。

効果：回復魔法の効果2倍

『鑑定士』 真作・贋作を理解する。効果：真贋を並べればどちら
が本物かわかるようになる。

吸収したスキル

『絶倫』MAX : ゴブリン・ハイゴブリン・オーク・ハイオーク
絶倫になる

『繁殖力』MAX : ゴブリン・ハイゴブリン 孕ませやすくなる

『無謀』 : ゴブリン 恐怖を感じにくくなる

『武技の心得』MAX : コボルト 効率のいい攻撃方法の知識

『威嚇』MAX : コボルト 威嚇の成功率上昇

『剣聖』 : ハイコボルト 剣の扱いが上手くなる

『神槍』 : ハイコボルト 槍捌きが上手くなる

『乾坤一擲』 : ハイコボルト 一撃の威力を強くするが、使用後に隙ができる

『強者』 : ハイゴブリン 強者の風格を漂わせ、雑魚を近寄せない

『狡猾』 : ハイゴブリン 悪知恵が働きやすくなる

『種族の長』 : ハイゴブリン その種族のリーダーとなる。

『自制心』 : ハイオーク 自分の欲を抑える

『強欲』 : ハイオーク 欲求が満たされにくい

???系

『進化』 : ハイゴブリン・ハイコボルト・ハイオーク 現在ではで
きません

『種』↓『発芽』 このスキルは開放条件が満たされてはいません

■■■■ 己の真名。 開放された時、真の力を得る

『悪 ■ 道の▼』 開放条件が満たされてません

『求敵飢』 強敵に遭遇しやすい

『×道を%#\$者』 開放条件が満たされていません

『善悪の天秤』 ± 常に変化 『種』 系統に影響がある。 思考

がどちらかに行きやすくなる

『恩返し』 恩を忘れなくなる

skill lost

『悪逆非道の心』 開放条件を満たせません

称号：■■■■の封印されていた祭壇の王

不明スキル：訳

『悪逆非道の心』 開放条件：「泉の悪精を。。。しろ」をクリア

『覇道を歩む王者』 開放条件：称号〳の王、強者を20体以上撃破する

すらいむ？ 転生…… 主人公保持スキル（後書き）

レベルアップボーナスのスキルはスキルというほどのものではなく、人でいう新陳代謝が向上したとか体調がよくなりやすいとか、そういった効果。

キャラ設定：フォースデッド大陸（前書き）

Ver
このお話に出てくるキャラの設定、フォースデッド編：すらいむ

勇者？のほうとは別のキャラ設定がです。

更新中

キャラ設定：フォースデッド大陸

現代組み

主人公

名前：中西柚木

年齢：32歳

性別：男

性格：冷静

容姿：地味、普通

特技：糸を通すのが少しだけ上手

趣味：特にない

好きなもの／こと：平穩

備考：まるで二次元のモブキャラのような立ち振る舞い。あま

り目立たないが友達がいらない訳ではなかった。親友ができてから

女子に嫌われたしたが親友の説得により事態は収束した。

親友の才能が羨ましく思っていてその嫉妬心に気付き逃げ出した

転生後の主人公（擬人）

名前：村雨忍

年齢：？

性別：一応男

性格：冷静（スキルのせいではほぼ強制的）

容姿：更に地味な容姿に拍車がかかっている

特技：魔法、暗殺
趣味：裁縫

備考：擬人したものの本名を名乗れなかった柚木が名乗った偽名。魔法をただの道具としか思っているためほいほい使う。が、そのたびにリリーに止められる。

最近はリリーにぬいぐるみを作っている
一応これが本体である。

主人公の分体達

名前：遠藤海斗、小林宙、畑田衛…… e t c

年齢：17前後

性別：一応男

性格：それぞれ違う

容姿：高校時代の知り合いの姿

特技：それぞれ違う

趣味：それぞれ違う

備考：擬人した結果こうなってしまった分体達。

聖剣を守る畑田、世界を旅する小林、ギルドに入った遠藤、といういろいろやっている。

畑田は勇者に殺され、経験値を勇者に献上。勇者は某メタルなスライムを倒したとき以上に一気にレベルアップするほど経験値を貯めまくっていた。

自我があって生き残ったのは既に二体だけで、バラバラに行動をしている。

但し、柚木「自分で造物主、命令は絶対である」

親友 更新：勇者

名前：髙原優

年齢：32歳

性別：男？ 生物学上では女

性格：優しい 臆病

容姿：男の娘？

特技：格闘技

趣味：柚木と遊ぶこと

好きなこと／もの：柚木と一緒にいる時間

備考：柚木が突然いなくなった為ショックで引きこもる。 24

歳の時親が事故死。 心がボロボロになった末、29歳で立ち直り
持ち前の才能で就職。 柚木の会社のライバル社で同僚の情報から
柚木を発見。

話しかけようと柚木を尾行、久しぶりに見つけた嬉しさで今まで
の苦しみが一気に吹き飛ぶ。

涙を流してしまい、何を話そうかと戸惑い、驚かせようと柚木の
肩を叩く。

その時柚木はその衝撃で車道に出てしまい、車に轢き逃げされる。
自分が殺してしまったと自殺を考えた時、籤引き屋に出会い勇者
として召喚されます。

すらいむ？

名前：■■■■■

年齢：0歳

性別：意識的には男

性格：純粹

容姿：白く濁ったドロドロした感じの不定形生物。 ゆうなまの

ニジリゴケピュア種じゃね？と書いてて気付いた

特技：体を触手状にして敵を貫くこと。 温度、硬度、質量、体積、等々操作できる

趣味：まだない。 最近では殺しすぎたせいで悪に傾き気味

好きなこと／もの：まだない。 最近ではいたぶることに興味が
出ている

備考：寝の妄想を詰め込みまくった反則級の化物。 体液を取り
込むことで相手のスキルをコピーすることができる。 基本的に養
分も一緒に摂る為肉体ごと吸収している。

ノクターン行きも若干視野に入れた結果の能力で性魔法などもあるが、エロは書きませんのでそこらへんはごまかします。

籤引き屋

名前：不明

年齢：不明

性別：おそらく男

性格：快樂主義者

容姿：おそらくおっさん

特技：面白そうなやつを見抜くこと
趣味：籤を引かせること

備考：これまで何度も籤を引かせ続けてきたおっさん。その正体は不明。

なんとなく柚木に引かせたが、優には自分から引かせに行く。
ぶっちゃけ使い捨てキャラ。転生者によくあるかみさま的存在。
だが何が出るかはランダム。

異世界組み：フォースデッド

バレンタイン工房の店主

名前：リリー・バレンタイン

年齢：16

性別：女

性格：微天然、寂しがりや

容姿：美人系

特技：鍛造

趣味：ぬいぐるみと戯れる事

備考：父の名はグラン・バレンタイン。この設定集に名前しか出てこない。名前すら執筆中に適当に決められた人。

母の名はマイヤー・バレンタイン。以下同文

知らない男に対し、警戒心を人並み以下ぐらいにしか持たないた

め、 그레이に心配されている。

容姿は悪くは無くむしろ良いほうなのでナンパを偶にされ、そのたびにのこのこ着いて行き、父親に止められていた。

父は犯罪者を殴り飛ばし押さえつけた所、背後から犯罪者の仲間
に刺され、死亡。因みに父のレベルは173と世界でも最高クラス
のレベルだが、心臓をやられて一撃死。

ステータスは力に極振りだった（鍛冶仕事で毎日鍛造をしていた
ことが原因）

犯罪者は憲兵にその場で殺された。

この事件から、父の仕事を受け継いだリリー。

忙しくてナンパを断るようになっていた。ナンパだとは気付いて
ないが……

リリーの幼馴染

名前： 그레이・アルフォード

年齢： 15

性別： 男

性格： 素直になれない

容姿： 目つきの悪いが整った顔

特技： 剣術

趣味： リリーの喜ぶ姿を見る事

備考： リリー大好きっ子。

リリーには弟としか見てもらえないため若干拗ねている。

柚木の登場に危機感を抱くが、時既に遅し？

優秀なハンターで、その実力はAランクの上位に食い込むほど。

ライバルはカイトという最近Aランクになったハンターだが、その正体は柚木の分体である事を彼は知らない。

フィーツ村

村人A

名前：不明

年齢：30代

性別：男

性格：陽気

容姿：普通

特技：人助け

趣味：ここはフィーツ村だぜ。と旅人に言うこと。

備考：完全な悪ふざけの産物。超モブキャラ。だが前世の柚木のほづがモブキャラの顔。

聖剣の精霊

名前：ホープ

年齢：？

性別：？

性格：武士っ娘

容姿：半透明、白いオーラ、女性体

特技：アナライズ

趣味：鍛錬

備考：まだ登場してないよ

キャラ設定：フォースデッド大陸（後書き）

見やすいように大陸ごとにキャラ設定を分けます。
出会ったところではなく、出身地で。

1 話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭（前書き）

処女作です。 つまり拙い文章があなたの眼を腐らせる可能性があるわけ。

そこんところろしく

この小説は寝の好きな設定をいれまくった作品です。

黒ひげの能力を奪うところに始まり、事故ナギやマダンテ使いのスライムいいねってなってレベルアップシステムいれようとなった結果の作品です。

敵も強くするつもりですが、主人公の成長力には敵わない。

こういったのが嫌いな方は即退避。

1 話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭

初めまして私の名前は中西柚木32歳童貞だ。

つまり魔法使いだ。 どうでもいいけど2回言いました。

私は所謂草食系で、彼女もいらなと思うてるし、結婚もどうでもいい。

私はもてたことがない。 私の親友はもてもてだったが。

私の親友は中性的な顔で体育は休むが運動神経がいいらしい。
優しいのでかなりの人気を誇っていた。

親友はいつも私の近くにいた。
いつも自分の家か私の家で遊ぼうと誘ってきて、そのくせ他の人からの誘いは断るので私は親友のふあんくらぶにいじめられた時期があった。

親友の説得により影からこつちを見てこつそり騒ぐのはやめて欲しいがいじめはなくなった。

私はそんな親友の才能が羨ましかった。 あこがれていて、妬ましかった。

そんな自分に気付いた私は、高校を卒業してからすぐに一人暮らしを始めた。 誰にも相談せず、親にも住所を告げずに。

親に言えば親友に伝えてしまいそうだからな。

そんなこんなでもう32歳。

会社の帰りに後輩と呑みに行った帰りにそれは起こった。

いつもの通りに知らない店があった。 このあたりはよくくるか

ら知らない店などないはずなのに。 気になった私は店に入ってみることにした。

店には余り物が置かれてなかった。
これでは何の店なのかわからない。 店主に聞くことにした。

「ここは何のお店なんだい？」

「ここは籤引き屋だよ。 1回2000円だ。 やってくかい？」

高かった。 籤なのに。

「何の籤なんだ？ 出店のとは違うんだろ？」

「この籤に書かれてあることが起こるんだ。 運命を決める籤とも思っていてくれ」

「運命？ おもしろそうだな、ためしに1回引くよ」

「なら、この箱から一枚引くんだ」

籤には当りが奥のほうにあるらしい。 だからあえて真ん中を引く！

「何だこれありえないことにも程があるだろ」

「ありえないことでも、そこに書いてあることは絶対なんだよ」

え？ と呟いた瞬間に目の前が真っ暗になった
最後に見たのは、さっきまで私がいた空き地と真っ蒼な顔でうつろ
たえる親友の姿だった。

そして目が覚めたとき私は暗闇の中にいた。

「どうしてこうなった」

「まさか異世界転生を引くとは、10000枚中3枚しかないんだがな。転生系は何に生まれ変わるかわからないからかなり危険な部類だし。どうなったか見ものだ。それにしてもさっきのやつ、普通の転生の時と死因がちよっと違ったな。原因はさっきのやつか。よし、つぎはさっきのやつにしよう。あははははは。せいぜい楽しませてくれよ。」

1話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭（後書き）

後書き

マスターベーションにもほどがある小説だ。 と心の中で予防線

現在6話目書き終えて、能力考えるのと量がちよつと…… って感じになってきた

面倒なのでスキルはあまり書きません

7話以降のスキルの扱いなんかが雑になります

大体ノリだけで書くからこうなるんだ。 構成なんてないから頭の中でゲームやアニメや漫画を思い浮かべて話作ってるのでこれである種二次創作？

転生先は不定形生物でした（前書き）

短いので一気に投稿

転生先は不定形生物でした

どうも異世界転生のくじをひいたらいつの間に暗闇の中にいた者です。

とりあえず周囲の状況を把握しよう。

ここは暗い洞窟の中、近くに水が流れる音がしてる。情報はこれだけだ。

ひとまず水の確保に向かおう。

……歩けない？

何だこれは、そういえばやけに視線が低い。

首を動かさなくてもあたりを見渡せる。

私は水の気配なんてわからないしあきらかにおかしい

自分の姿が見えない事がこんなに不安になるとは……

どうやって水場にいくのか。このままでは餓え死ぬ。

それから少ししてようやく前に進むことができた。

どうやら前に倒れこむような感覚で全進できるようだ。

動くのにいちいち全身を使わないといけないとは面倒な。

不思議と疲れないし這って進んでいるようだが以外とはやい。

たしか転生したんだっとな。

まさか蛇にでもなってしまったのだろうか。

いや、転生なんて……

私は覚えている。

——ありえない……とは言いきれない、か。

あの時何があったのかは知らないが何も感じる事が出来なくなっていたあの感じ。

恐らくあれが『死』だろう、もう二度と経験したくない。

痛くはないが怖いのだ。

もう死にたくない

生きるためにできることをしよう。

まずは金を稼がなければ……

そんなことを考えながら音を頼りに進んでいくとやはり小さな湖があった。

その中心には祭壇のようなものがあるがいまは気にしてられない。

恐る恐る自分の姿を確認しようと水に映るものを見ると……

スライムだった

——ただし白く濁っているが。

あの最弱と名高いスライムである

大抵のゲームでは核を斬られればお終いという設定があるが恐らくそっちの仕様なのだろう、半透明な体に小さな塊が浮いている。

体が液体でできているため物理的な攻撃には強いらしいが、打撃以外は普通に効くんじゃなかったかな

例えば叩きつけられたり、剣で斬られたりすれば簡単に死ねそう
だ。

これからどうやって生きていけばいいんだ……

転生先は不定形生物でした（後書き）

これスライムじゃなくて「ゆうなま」のピュアニジリゴケじゃね？と書いてる最中思ってしまった。

別に白い必要は感じなかったけれど、視覚的になんか卑猥じゃん。
白濁色

ちなみにこれが寝なりの18禁描写です

私に出来る事、出来ない事（前書き）

この液体の体出来る事の確認

因みに攻撃力だけならコボルトに匹敵して、
防御力はこの世界で
一番低い状態

私に出来る事、出来ない事

どうも、不定形生物になってしまっている者です。

この体は水の補給が余り必要なさそうなことに気づいたんだ。
水分が抜けにくい体みたいだし

ここは結構ひらけた場所みたいなので自分がどれだけの能力があるか調べておこう。

私のような凡人には細かい検査と調整が必要なのだよ。

特にこんな野生生活が要求される場合は――経験なんてないけど。

どうやらこの体、思っていたよりも能力があるようだ。

まず、速い。凄く速く動くことが出来る。

初めは慣れなかったが前に屈むような感じで走れた（足はないが）

ああよかった、某げーむに出る最弱の敵のように跳ねるのかと思っていたから……

もしくはあの泡のようにずるずるとしか動けないと思ったんだがこれはいいな。

そして、疲れない。どれだけ速く走っても運動しても疲れない。

次に、とても器用だ。前から人並み以上に器用だったがそれ以上に器用だと思う。

触手のようなものを体から出せるようなのだが、それを手の代わりに扱え、鞭のようにも出来る。

しかも自分の体のどこにでも視覚があるようで、どこから見るかは自分で決められるのみたいだ。

触手は伸ばしすぎると体積が減るのだが、自分の意思で斬撃、打撃と換えられるし、

そこらに落ちていた石を積み上げてみたのだが18段ほど積み上げられる程精密な動作が可能なようだ。

まあ、手が沢山あるようで並列思考をしなければまともに動かないのだが、それでも正確に積み上げることが出来た。

疲れないから集中し続けられるので予想外に便利な体だと喜んだ。だが、この体、ものを支える力がないのだ。

ある一定の大きさの石を持ち上げられなかった。

12歳児が全力でやっと持ち上げられるくらいの石を持ち上げようとしたが、無理だった。

触手はある程度、強弱をつけられるみたいで、叩く時に中ぐらいの石を叩き壊せて、貫く時は、木ぐらいなら簡単に刺し貫くことができた。

私が確認したことは大体このぐらいだな。

人間ではないとはいえ生きている以上は栄養を取らなければいけないだろう。

狩りなどしたことがないのでわからないが私に単純な力がない以上正面から戦うのは危険だと思う。

罨にかけるか不意を討つ位しか思いつかないな。

結局罨にかけて殺すことにした。

罨作りに時間がかかるのでそれまでは虫や草で繋いでいこう

野菜だけで生きられるだろうが肉も食いたいのだよ、肉を。

それにしてもどうやって食べようか。

こつ……絵の具の色が侵食するような感じで吸収できないかな。

体の中に放り込んでどうすればいいか悩んでいると虫が突然もがきだした。

そしてどんどん溶けてしまい、その間とても微妙な味がした。

どうやら味覚もあったようだ。

ではなくこれはお約束の体液を酸性にして溶かしながら摂りこむということか。

体の一部を切り離して相手を溶かす↓吸収↓体を回収といったことも出来そうだ。

切り離れた体は自由に動かせるみたいなのだが、ただでさえ並列思考がきついのに更に脳を（そんな物は見当たらないが）圧迫する。

私の平凡な頭脳が並列思考でただだけで凄いの、これ以上は演算能力が足りない。

高速思考なんて出来れば苦労はしないのだが、私は能無し才なしの平凡人間なのだ

——もう人間ではなさそうだが。

当面は畏にかかった獲物にぶっ掛けて弱らせる用途にしか使えないだろう。

畏を作り終わったのは結局次の日だった。

睡眠を摂らなくても生きていける体はあるが精神的に疲れることはあるようで結局一度寝ることにしたからだ。

造った畏は簡単な物で14メートルほどの落とし穴だ。

酸で溶かしながら決ると簡単に14メートル掘る事が出来た。

この穴に落ちた獲物に向って強力な酸を吐き出し、胸を一突きすれば倒せるだろう。

そして湖に仕掛けた罠に何か掛ってないか確認しに向って穴を覗き込むと、二足歩行の豚がいた。

豚は私の影に気付きこちらを見上げ恐ろしい表情で睨みつけ叫びだした。

……もしかして仲間を呼んでいるのかもしれない
そう思った私は早速捕食をするために作業を開始した。

強力な酸になった私の体を切り離して投げつけると少し驚いた後豚はすぐさまその太い腕で払い落としやがった

全身にかかるはずだった酸は命中しなかったが豚の腕は爛れている。使い物にならなくなったのだろう。

触手で豚の胸を突きに行くと腕で防御されたが酸にやられている腕では止められなかったようだ。簡単に貫通してしまった。

これで動きは止まったがまだ油断はできない

私は触手で頭を本気で殴り、また、もう1つの触手で心臓を貫いた
びくびくと痙攣している

まだ死んだかわからないのでさっき打ち落とされた体で豚を吸収
することにした。

Level up 5 + 4
生命力：10 / 30 + 20
魔力：3 / 5 + 2
攻撃力：21 + 9
防御力：16 + 7
素早さ：78 + 26
器用さ：56 + 15
賢さ：38 + 4

魅力：12 + 4

Skill get

NEW 『下克上』

NEW 『分析者』

NEW 『初級強化魔法』

NEW 『初級魔法』

NEW 『体液操作』

オークからスキルを奪い取りました。

NEW 『怪力補正』 + 1

NEW 『絶倫』 + 1

NEW 『初級性魔術』

武器：鉄の槍を吸収しました。

NEW 『貫通補正』 + 1

NEW 『貫通耐性』 + 1

レベルが上がったので吸収効率が上昇しました

触手の操作をしやすくなりました

オークの所持スキルを吸収しました

何かが頭の中響いてきた

よく判らないが強くなったということだよさそうだ。

…… ちょっと待て。魔術ってなかったか？おい。

私に出来る事、出来ない事（後書き）

攻撃力と単純な力は「ではありません。

力の強さは持つことのできる道具に関係します

例えばサイクロプスは片手に超巨大鉄製棍棒を持っても、簡単に振り回せます。

ゴブリンも鉄の剣や槍をぎりぎり使えるレベルで、一人一人を2匹がかりで持ち運べます。

因みに攻撃力には酸や魔法の攻撃力は反映されず、それぞれ隠しパラメータとして存在しています。

私に秘められし能力（前書き）

前話と同じく能力確認が続きます

話は待ったく進みませんが一応必要なことかと

私に秘められし能力

どうも、おおくという豚を喰らったら謎のお知らせが頭に響いた者です。

とりあえず先ほど頭に突然響いてきたことの中に魔法を使えるようになったみたいなき事があったんだが、どう遣えばいいんだ。

魔法だの魔術だの使い方がわからないと意味がないだろう。誰か教えてくれ。

などと思っけていても誰もいない。というか今の俺を見たやつがいたら驚いて逃げるか襲い掛かってくるかだろう。

先ほど手に入れたすぎるに分析者というのがあったと思うのだが、まず、すぎるの使い方がわからない

ぶんせきーぶーーん 二二（ ^ω^ ）二 せきいなどとふざけていけると突然目の前に透き通った板状のものが現れた。

そこにはこう書かれていた

名前：ナカニシ・ユズキ

種族：■ ■ ■ ■ ■

性別：♂？

状態：冷静

Level：5 成長限界：5 / 7 + 3

生命力：30 / 30

魔力：5 / 5

攻撃力：21

防御力：16

素早さ：78

器用さ：56

賢さ：38

魅力：12

Skill

『冷静』

『異世界からの遭難者』

『吸収』

『超越』

『成長』

『触手操作』

『体積変化』

『体積操作』

『体液変化』

『物理半減』

『精密』

『並列思考』

NEW 『下克上』

NEW 『分析者』

NEW 『初級強化魔法』 消費魔力：4

NEW 『初級魔法』 消費魔力：2

NEW 『体液操作』

NEW 『怪力補正』 +1

NEW 『絶倫』 +1

NEW 『初級性魔術』

NEW 『貫通補正』 +1

NEW 『貫通耐性』 +1

なにやら自分を分析したようだ『冷静』のすぎるによって何故か
落ちていていられる。

いつもならもっと、なにこれ怖いとかいって興奮してたのに。
もしかしてさっきの豚を殺しても動じなかったのはそういうこと

なのか？

『分析者』は念じていたら使えた。

『冷静』は勝手に発動していたようだ。

常時発動型とかなのだろう。となると魔法は常時型なわけがないから念じればいいのか。

「むむ……ふあいあ」

轟ッ

凄い物が出た。ちよつとした火炎放射つて感じた。

というか何気に私がこの体で喋ったのって初めてなんだが、つか喋れたのかよ。

「あ・ああ・あ、うん喋れるみたいだな」

と、いつでも一人で喋るのはなんだか淋しいので結局喋らないだろう。

魔法に関しては適當なことをいいながら想像すれば使えるみたいだ。

回復魔法の想像とかあまりできないんだが、そこは要練習。

ふあいあ、じゃないものならどうなるんだろうか。

じゃあ次は、

「めら！」

ボウッ——バンッ！！ジユウウウ……

火の玉が出てきた。

火力はある方なのだろう。水蒸気がそこそこ出ている。

ふあいあは地面抉っていったから威力はそうでもないのだろう。火をつけるのに便利ぐらいだ。

私にできるのは初級魔法なのでめらみやふあいらは使えないだろう。と、いうわけで

「ぶりざど」

……何も起きない。

もういちど

「ぶりざど」

駄目だった

なにがおこったのか分析する。

・ ・ ・ かなり便利な技だなおい

ただの魔力切れでした。

5の魔力では2発が限界ということなのだろう。

魔法だなんて新鮮だな

こんな反応ですむのは『冷静』のおかげなんだろうな、実はかなり驚いてるんだが。

そして気付いたことがある。

魔力は解るが魔法攻撃力は全くわからない。

『補正』のような感じで+補正でもかかるのだろうか
それとも隠し熟練度？

支える力がなくても触手の攻撃力は簡単に岩を破壊できるのだ。

恐らくれべるが関係していると思うんだが……これがもしそうだとしたら強い相手であればあるほど魔法の威力が上がるのだろうか。

これからどうしよう、死なないように強くなるかな……

私に秘められし能力（後書き）

次話もあまり進みませんので同じ日に投稿します

戦闘準備、私の策（前書き）

一 対多数戦の為の作戦作り

戦闘準備、私の策

どうも、生き残るために強くなろうとしている者です。

強くなければあの豚のように殺されるような環境だから、私にはきついが何とかなるだろう。

早く強くならなければ死んでしまう……

あの化物を殺すことと食べることのどちらでもよさそうだが、そうすれば強く成れるようだ。

そして相手が自分より強いほど成長が早くなる。

——豚は自分よりかなり強かったようだ。

そうとわかれば私の行動は早かった。まずは偵察から始めた。周りのものを最大限に活かさなければ死んでしまう確率が上がるからな。

面倒だが私には正面から闘り合って生き残れる自信がない。そうするのをもっと強くなってからだな。

触手を使ってこの湖の周りには3種類の化物がいた。

子鬼と犬人と豚人だ。

解析を使った結果名前は「ごぶりん」「こぼると」「おーく」というらしい

子鬼ゴブリンは薄汚い色をしていて、背丈は小さく、頭に小さな角が生えている。

犬人コボルトはそのまま二足歩行の犬だ。人が立っているような姿だったのでそう勝手に呼んだ。

豚人オーク こいつはこの前食べたやつと同じ種類のようだ。

この3種類とも繁殖力が強いようだ。特に子鬼と豚人が多かつ

た。

種族として一番強いのは豚人のようだが、時々犬人にやられているところを見かけた。

どうやら武器の扱いが一番うまいのが原因のようだ。

槍を無闇に振り回す豚人と確実に攻撃を当てていく犬人。

1対1ならどちらが勝つかわかるだろう。

と、いうことで一番弱い子鬼から殺していくことにする。

3種族はうまくバランスが取れているようで、

豚人が犬人を襲う↓犬人が子鬼を襲う↓子鬼が人里をよく襲うまたは魔法を使って豚人に攻撃

という連鎖が起きている。

子鬼は魔法を使える個体と使えない個体があって、威力も同じ強さの個体でも強い個体と弱い個体がいる

このことから魔法の威力はある程度種族で決まり、強い、弱いは個体差があることがわかる

私の魔法の威力は強いほうのようで、子鬼の魔法は豚人に集団で焼き殺すのに対し、私の魔法は一発で火達磨に出来る。

1発で殺せないし、連発もできないので余り使えないが

人に逢いたいと想ったが今の私はあいつらと同じ化物。 見つかれば殺されてしまうだろう。

そんなのは嫌だ。

私は元人間だから、何もしていないのに剣を向けられるのは辛し嫌なんだ。

私は普通の人間———その他大勢といった立ち位置だったからよく判る

人は自分と少し違う人間を好み、かけ離れている人間を迫害する。事実、私の親友は他の男子から距離を置かれていた。

……たぶん怖いからだ。 皆、天才と呼ばれるやつには関らない
か気に入られようとするのどちらかだ。

今の私はどこからどう見ても人間ではない。 出会えば間違いな
く殺される。

子鬼は他種族の雌または同種族の雌と生殖行為をすることによつ
て繁殖するようだ。

この間犬人の雌を集団で襲っていたのを見たことがある。 豚人も
同じようにして繁殖するようだ。

発見した時は見るに絶えず、思わず逃げ出してしまった

子鬼は弱い割りに大勢いる。 それこそ他の種族よりも多く、子
供の成長も早い。

群れの中には他の種族にも言えることだがそれぞれ長がいた。
かなり強そうで知恵もそれなりにあるようだ。 こいつにだけ気
をつければ大丈夫だろう

子鬼は群れるが長以外知恵がない。 群れているのも長の命令だ
ろう。

と、いうことはこいつさえ殺せば命令系統は駄目になるのだろう。

なんだかゲームのようだな。

だが私は経験値を溜めたいのだ、皆殺しにする。

私の策はこうだ

子鬼の数を減らしていけば長もその内気付く。

そして身を守る為に一箇所固まるように指示を出すだろう。

巣穴に戻った子鬼達の出入り口を1箇所を除いて塞ぐ。 入り口を崩せばいいだろう。

外に残った子鬼は1匹を残してそれ以外を殺して吸収する。

残した一匹を巣に逃げ込ませて恐慌状態にする。

それを追いかける。 その際入り口を1つを除いて総て塞ぐ。

曲がり角があっても出口を塞いであるから逃げられない。 結果、更に地下のほうにいくことになる。

どんどん追い詰めていつて最後には長と戦うことになるのだろうが、一対一ならば勝てるだろう。

複数と戦う時は魔法を使う固体の援護が厄介なので優先して殺す。

この作戦ならばいけるだろう。

最初は一番小さい巣を襲うから失敗することはないはずだ

幸い私のいる地域はこの世界でもかなり端の方のようで、小さな人里があるが、そっちの方向以外は海に囲まれている。

木々の多い森林地帯でもあり、身を隠すのに良い。

奇襲にもいいだろう。

子鬼が最初の襲撃で巣を捨てることはないと思うが、できることなら、一回目で決めたい。

戦闘準備、私の策（後書き）

奇襲しか思いつきませんでした

幸い攻撃力があるので、刺して貫いて突然酸をぶっ掛けて溶かす
作戦です

現段階ではゴブリンに正面から戦って、一人では勝てませんが、成長します。 ゆうじろうの如く

鬼殺し（前書き）

戦闘シーンって難しいね

僕は戦闘パートより日常パートのほうが好きだな

鬼殺し

どうも、凡人の普通で無難な作戦を考えましたものです。

今、現在進行形で襲撃中。子鬼達が逃げ惑うところに2〜3体残して触手で貫いていく。

『貫通補正』の効果で貫通力が上がっているようだ。木の盾ごと貫ける。

「ギギヤアアアアアア」

「ゲゲエエエエエ」

「ギツツ!?!?!」

子鬼の悲鳴と血飛沫が上がる。

この光景をみても何も感じる事が出来ない。

なんだか本当に化物になってしまったような気分だ。

姿は変わってもせめて心だけは……

心の中で苦笑する。———こんなことを考えてる時点でもう

……

「私が強くなる為に、私の糧となってくれ」

死んでいく子鬼にそう小さく震えた声で呟いた。

殺した子鬼に向って自分の体を小さくしたものを飛ばして吸収させていく。

今頃、地上から私のもとに戻ろうとする分体を取り残した死体を回収しにくるだろう。

そして、最下層。一番広いところの中央に子鬼の長がいた。

子鬼は全員武装しており警戒をしている。
悲鳴が消えたことに気がついているのだろっ、落ち着きがない。

私は、見つからないようにこっそり後ろの子鬼に襲い掛かり丸呑みした。

子鬼はようやく私に気付き驚いていたが、長は誰より早く自分を取り戻し、子鬼に私を包囲させた。

私はわざと取り囲まれ、いつせいに私を叩き潰そうとしたとき、その一瞬のうちに触手で周りの子鬼を突き殺した。

私がついて来た道以外は潰してあるので私が子鬼達の背後を取ったため、子鬼達が一斉に出口に逃げ出した。

だが、その先には私の分体がいる。

子鬼達はそのついでにどんどん喰われて悲鳴を上げる。

「グボッ！　ゴボボッ」

「ギッ！！　ガアッ……！！　ググウ……」

部下が全滅したことに気付いた子鬼の長はこちらを血走った目で睨みつけてきた。

「ギギギイイイイ！！！！！！！！」

ブォン！！！！

かなり大振りな攻撃だ。　だが当たればかなり拙い。
触手で持っている武器を叩き落そうとするも失敗する。

少しこちらがおされ気味だ。

このままではやられる……！！

「しまった！！！」

子鬼の長はその手に持った棍を私に向って振り下ろしてきた。

「くっ…… ふぁいあっ！！」

とつさに魔法を撃つことに成功した。 が、その魔法は右手の盾に受け止められてしまった。

「ッ！！！！まずっ！！」

そのすきに再び棍を振り下ろす子鬼。

—— こんなところで……

子鬼の長は予想外に強かった。

今の自分では正面からは勝てない。
だから……

グ
パ
ア
！！！！

「ギギッ！？！？！？」

先ほど巢にいた総ての子鬼を吸収し終え、かなり大きくなっている分体が子鬼の長の後ろから襲い掛かった。

「やった……」

「ギイイイイイイイイイ！！！！ アアアアッ！アア……

……ギギ……ギ」

子鬼の長の断末魔が聞こえてくる

この声をどこか心地よく感じてしまう。

そしてこの巣にいる子鬼を全て殺した私の頭にあの声が響いてきた。

「ゴブリンの巣を襲撃しろ」をクリアしました。

ゴブリン殲滅率：208/208

ゴブリンの巣踏破率：100%

宝回収率：0/0

ボスモンスター：ハイゴブリン Lv8

ボスモンスター討伐ボーナス：スキル『統率』『カリスマ弱』

クリア率100%ボーナス：全パラメータアップ+10

スキル『良運』

Level up

Level：5↓16 +11

生命力：120/605 +575

魔力：3/114 +109

攻撃力：79 +58

防御力：43 +27

素早さ：127 +49

器用さ：103 +47

賢さ：101 +63

魅力：49 +37

Skill get

NEW 『統率』

NEW 『良運』

NEW 『カリスマ弱』

NEW 『解析者』

NEW 『高速思考』
 NEW 『圧縮』
 NEW 『魔力攻撃力増』
 NEW 『物理無効』 + 1
 NEW 『分裂』
 NEW 『鑑定士』
 NEW 『高速処理脳力』
 NEW 『種』 このスキルは開放条件が満たされていません。
 ゴブリンからスキルを奪いました
 NEW 『繁殖力』 + 109
 NEW 『絶倫』 + 110
 NEW 『無謀』
 『初級性魔術』 + 109
 『初級魔法』 + 112 連射が可能になりました
 木の棒を吸収しました
 NEW 『打撃補正』 + 1
 NEW 『打撃耐性』 + 1
 木の盾を吸収しました
 NEW 『衝撃補正』 + 1
 NEW 『衝撃耐性』 + 1
 木の弓矢を吸収しました
 NEW 『刺突補正』 + 1
 NEW 『刺突耐性』 + 1
 ハイゴブリンからスキルを奪いました
 NEW 『進化』 開放条件を満たしていません
 NEW 『強者』 + 1
 NEW 『狡猾』 + 1
 NEW 『種族の長』 + 1
 木の棍を吸収しました
 NEW 『棍術補正』

人間からスキルを奪いました

NEW 『薬師』

NEW 『言語能力』

NEW 『鍛冶師』

NEW 『魔法使い』

NEW 『冒険者』

NEW 『全状態異常耐性』

NEW 『俊敏』

NEW 『直感』

NEW 『神官』

NEW 『光属性魔法耐性』 + 1

NEW 『回復力上昇』 + 1

今回はかなり成長できた。

吸収した子鬼の分の質量を使って触手の射程を伸ばしたり、数を増やしたりできるので、もう苦戦することはないと思う。

しかも自分と同じ強さ、大きさを持った分体を作ることができるようになった。

こいつは勝手に生き物を喰らい、強くなるのでよく本体より強くなる。

制御を自分がしているので動きも連携も取り易い動きだ。

先ほど倒した子鬼の長は子鬼ではなく中鬼ゴブリンという名前ハイゴブリンのようなので中鬼と呼ぶことにする。

中鬼はやはり他のやつよりも強かった。 おかげで私もかなり強くなれた。

しかし、子鬼達を蹂躪していく時、凄まじい快感を感じた。
本格的に心が体にひきづられているのだろうか。

私はそんなことにはならない。なるものか。

『冷静』を発動したまま、そう決心した。

だが、まだ強くならねば……

子鬼はあれで弱いほう。

もっともつと強く。誰にも負けないくらい強くなりたい
そのために殺す。皆殺す。殺した数だけ強くなれる。

私は人間だった頃ではありえない感情を胸に抱いたまま次の獲物を求めて動き出した。

S k i l l g e t

N E W 『悪 ■ 道の ▼』 開放条件が満たされてません

N E W 『求敵飢』

N E W 『×道を%#\$者』 開放条件が満たされていません

鬼殺し（後書き）

他の小説読んでて偶に思うけどもつと長くしたほうがいいのかな？
具体的には4000字前後

一応設定集は出すつもり

狂気の片鱗（前書き）

いや、文字数稼ぎした訳ではないんです。
ただ、なんとなく伏線を……
回収できるかわからないんですけどねー

狂気の片鱗

ここら一帯の子鬼達を狩り終えた。

流石に異変に気づいた犬人と豚人だが、あまり気にはしていなかった。

次の標的は犬人である。

どうやら同じ能力を持つやつを吸収すればするほどその力が強化されていくようだ

子鬼を吸収したことにより魔法の威力がとんでもないことになっている。

今ではその魔力で簡単に倒すことができる。

武器を使いこなす犬人でも私の魔法の前には無力であった。

そうして、犬人を吸収していった。

『威嚇』や『武術の心得』といった簡単に能力を奪うことができた。

しかし、誤算があった。

犬人と豚人が徒党を組んだのだ。

私を殺そうと躍起になっている。

そのことに気付いた私の心にどす黒いものが纏わりつく様な感覚があった。

私を殺す？　面白い。　殺して殺して殺して殺して
殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して
殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して
殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して
殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して
殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して

ちやに、原型がわからなくなるほど溶かして吊るして晒して解して
全てを奪ってやる

そこまでいって私は『冷静』を使い平静に戻ることができた。

なんだこれは

こんなの知らない、私はこんなに残酷な考えをしていなかった。
 こんなにもおかしいこと考えなかった
 きつと、殺す方法ばかり考えていたから疲れているんだろう。
 あいつらを潰したら一旦殺すことをやめよう。
 ああ、私の心は少しずつ化物になりつつある……

今回ばかりはいつもどおりではない。

いつもと違う戦場、この連合は大きな集落に固まっている。

しかし、私は正面から突撃していった。

盾を吸収することによって防御力やいろいろな物理耐性がついて
いる。

今の私に傷をつけたいのなら後1段階は上でなければ無理だろう。群れの長と多対一でもいい戦いになると思う。

でなければこんな無理はしない。

豚人は子鬼の魔法に殺されるほど魔法に対する耐性がない。
故に簡単にやられる。

「ぶりざど ばぎ ふあいあ いお さんだあ

」

凍り、風に切り裂かれ、肉を焼かれ、四肢を四散させ、落雷に打たれる化物たち

いつものように分体をつくりだし回収させていく。

分体の数も今では10体つくり出せる。

それに、ある程度自立して動く。

あくまでも、簡単な命令だけだが。

しかも、弱い、魔法を放つことができる。

まあ、私の魔力使うから消費量が多いのが欠点だが、この状態になると合体魔法を放てるようになるので、その欠点は補える。

「合体魔法 暴風」

ばぎ を10乗させて放つ荒れ狂った鎌鼬が雑魚どもを切り裂く

「合体魔法 炎の渦」

ばぎ と ふあいあ を混合させた炎の渦が先ほど放った 暴

風の勢いに乗り、遠くの敵は焼き尽くし、近くの敵は切り裂き、
その切り口は焼け爛れていく

この2発の魔法で大分消耗したが敵はもう、数える程しか残っていない

豚人は長含む7匹しか残っていないが、犬人のほうは豚人を上手く盾にして火から身を守っていた。

それでも後37匹だ。

火の魔法を使ったのでやつらは酸素が足りなくなったり、熱で水分を奪われ、倒れていく

分体を7体程回収に向わせ、自分と3体の分体で残った敵を切り刻んでいき、刺し貫き、叩きつぶす。

この程度か

つまらない。 つまらない。つま
らない、つまらないつまらないつまらないつまらないつま
らないつまらないつまらないつまらないつまらないつま
らないつまらないつまらないつまらないつまらないつま
らないつまらないつまらないつまらないつまらないつま
らないつまらないつまらないつまらないつまらないつま

もっと俺を愉しませろ

もつと、もつと、殺し足りない、殺したい、蹂躪したい、征服したい、犯したい、絞殺したい、轢殺したい、焼殺したい、刺殺したい、圧殺したい撲殺したい射殺したい斬殺したい瀟殺したい爆殺したい磔殺したい毒殺したい扼殺したい惨殺したい暗剣殺したい縊殺したい暗殺したい殴殺塵殺活殺虐殺挾殺禁殺擊殺減殺劫殺構殺故殺恨殺慘殺斬殺殘殺三重殺射殺重殺銃殺肅殺生殺尊屬殺磔殺畜殺誅殺酖殺的殺鬪殺毒殺屠殺搏殺爆殺必殺封殺焚殺併殺砲殺忙殺謀殺暴殺撲殺捕殺補殺抹殺密殺默殺扼殺葉殺誘殺要殺轢殺自殺悩殺、なんで

？

何を考えていた？

私は……一体何を？

気がついたら辺り一体焼け野原となっており、分体達は10体どころではなくぱつと見ただけでも1000はいそつだ。

実際にはもつというのだろう

分体達は人里までは行っていないだろうが、この森全ての生物を喰らい尽くしたようだ。

何故こんなに増えているんだ？

いろいろ考える前に、まずは増えすぎた分体を回収することにした。

「コボルト・オーク連合軍を撃退せよ」をクリアした

コボルト殲滅率：3738/742

オーク殲滅率：4061/1425

コボルト・オーク連合軍集落の踏破率：100%

宝回収率：0/0

ボスモンスター：ハイコボルト Level 21

ハイオーク Level 28

ボスモンスター討伐ボーナス：■■■■■の封印されていた祭壇

の王になった

スキル：『王者の威厳』『カリスマ中』『超力』『武技の真髄』

クリア率100%ボーナス：全熟練度+20

スキル『捕獲』『調教』『体液濃度操作』『隷属化』『解呪』

ゴブリン殲滅率：10298/0

Level up

Level：16↓52 +36

生命力：6000/6000 +5395

魔力：53/398 +284

攻撃力：302 +223

防御力：247 +204

素早さ：435 +311

器用さ：412 +309

賢さ：208 +179

魅力：180 +131

Skill get

NEW『■■■■』

NEW『真理の魔眼』

NEW『中級魔法』

NEW『沈着』

NEW『体液性質操作』

NEW『発芽』

コボルトからスキルを奪いました

NEW 『武技の心得』 MAX

NEW 『威嚇』

NEW 『技量上昇』 MAX

ハイコボルトからスキルを奪いました

NEW 『剣聖』

NEW 『神槍』

NEW 『乾坤一擲』

『進化』

オークからスキルを奪いました

NEW 『怪力補正』 MAX : 上位互換しました : 『剛力補正』

NEW 『絶倫』 MAX

NEW 『初級性魔術』 MAX 上位互換しました : 『中級性魔

術』

ハイオークからスキルを奪いました

NEW 『自制心』

NEW 『強欲』

『進化』

鉄の剣を吸収しました

『刺突補正』 MAX

『刺突耐性』 MAX 上位互換しました : NEW 『刺突半減』

鉄の槍を吸収しました

『刺突半減』 MAX

鉄の盾を吸収しました

『衝撃補正』 MAX

『衝撃耐性』 MAX 上位互換しました : NEW 『衝撃半減』

木の棍を吸収しました

『棍術補正』 MAX

木の棒を吸収しました

『打撃補正』 MAX

『打撃耐性』 MAX 上位互換しました：NEW『打撃半減』
ゴブリンを吸収しました

『初級魔法』 MAX 多重発動が可能になりました 上位互換
しました：『中級魔法』 既に獲得済みです

『絶倫』 MAX

『繁殖力』 MAX

『初級性魔術』 MAX 上位互換しました：『中級性魔術』
既に獲得済みです

レベルが上がったので触手の操作が自在になりました
固体になることができるようになりました
分裂した個体を自働操縦にできるようになりました

ゴブリンのスキルを全て奪取しました

ボーナススキル：『擬態』

コボルトのスキルを全て奪取しました

ボーナススキル：『人型擬人』

オークのスキルを全て奪取しました

ボーナススキル：『フェロモン』

狂気の片鱗（後書き）

柚木、暴走。

ワラキアみたいになるのが一番なんですけど私の貧弱な語彙ではこれが限界。

次回、祭壇に剣が刺さるだけ

封印されし聖剣（前書き）

聖剣は刺さってるのが王道だと思っんです。

封印されし聖剣

どうも、気がついたらこの森の化物全て吸収していたものです

あの後、回収し終わったら、自分の体がありえないほど大きくなっていた

実は自分の体は中型犬ほどの大きさしかなかったのだが、今は木よりも大きく、動くだけで木々を薙ぎ倒してしまう。

これでは目立つので、『圧縮』で体を圧縮すると、触手の威力と力が上昇した。

触手も、かなりの長さまで伸ばせるようになった。

どのくらいかというと、この森から人里を通って唯一道らしい道に少し入るくらいだ。

それと、もう一つ、重大なことがわかった。

先ほど手に入れた能力に、人間に擬態する能力を得た

正確には人型なら何でもいいうのだが、さっそく人間化することにした

久しぶりに2本の足で歩いたような気がする

触手はやはりこの体でも出せる。

今は全裸なので、少し恥ずかしいが誰もいないのでまあ、気にしない

私は、もうこの森の化物を吸収してしまったので、この地域を縄張りとする化物の王となってしまうていた。

雑音が混じってよく聞こえない名前だったので詳しくはわからないが、あの祭壇に何かが封印されていたようだ。
まさかとは思うが、私の体は封印されていて、私の魂が宿ったことで動き出したんじゃないかと思うと気が気じゃない。
私したのは転生で、憑依ではないのでそれはないと思うが少し気になる

なので、あの祭壇に行ってみると剣が突き刺さっていた
某げーむに出てくる聖剣のようだった

真理の魔眼を使ってその剣を理解しようとする

名前：聖剣・万の勇氣と億の希望を背負った剣
ブレイブ ハート・ジ・ホープ

種族：聖剣

性別：？

状態：封印

Level：132

生命力：10000/30000

魔力：5000/10000

攻撃力：1050

防御力：405

素早さ：341

器用さ：167

賢さ：29

魅力：286

skill

『聖剣伝説』

『精霊化』
『封印されし聖剣』
『勇者の剣』
『選定』
『光の加護』
『魔法攻撃力増』
『魔法防御力増』
『闇属性魔法半減』
『光属性魔法効果2倍』
『自働回復』
『自働修復』
『不朽』
『魔力吸収攻撃』
『魔力開放』

まじで聖剣だった。

どうしよう、とりあえず抜けばいいのかな？

あれ？聖剣？

聖剣があるなら魔剣とか魔王とかがいるのがお約束だろ。
私が抜いてしまったら拙かったりするよな。

少しだけ、食べてみてもいいかな……？

と、いう訳で少しだけ齧って吸収しました。

美味しかったです
もつと食べたい衝動に駆られましたが、そこは我慢
これ以上はばれてしまっただろう
少し刃こぼれしてる程度で抑えておかなければ……

S k i l l g e t

ブレイブ

ハート・ジ・ホープ

聖剣：万の勇氣と億の希望を背負った剣の一部を吸収しました

N E W 『半精霊化』

N E W 『光の加護（弱）』

N E W 『魔力開放』

N E W 『光属性魔法効果1.5倍』

N E W 『勇者』 このスキルを使用するための条件を満たして

いません

N E W 『魔力吸収攻撃（弱）』

N E W 『聖剣』

ちよこつとだけ齧っただけなのになんか私自身が聖剣化してしま
った

なぜか勇者になってるみたいだし、確かに聖剣食べるなんて勇氣
が要るけどさ。

……条件満たしてないってことはあれ抜いたら私勇者？

やだよ。

勇者なんて。

そんな厄介そうなことには首を突っ込まないのに限るんだ。
これは親友との経験でわかったことだ。

首を突っ込めば、間違いなく面倒なことになる

というわけで、この聖剣はここに放置しておこう。

いつかここに取りに来る勇者がいるのだろう。

少しふざけて、自動操縦の分体を一体この地域に放しておく。

こいつの設定は防衛

この祭壇の周辺の防衛をさせる

もちろん子鬼などの化物を自働で掃討、吸収するから地味に強くなるので勇者には苦戦してもらうことになるが、この程度の敵を倒せない程度では世界は救えない。

勇者にはがんばってもらおう

ここらの化物は暫くの間は現れそうに無いので最近手に入れた、『擬人』の力で村に行くことができそうだと考えた私は早速人型になろうとした。

しかし、あまり想像が上手くいかない。

最近は人間より化物を見ていたので、がんばっても豚の鼻や犬の耳と尻尾が生えてしまう。

基本となる顔すらあまりできていない

仕方が無いのでがんばって人間の頃の自分の顔を精一杯思い浮かべた。

地味な顔なので難しかった。

出来上がったのは自分の顔、それよりも更に地味で顔をみても1時間後にはいつの間にか忘れられているような顔だった。

体には熱があり、弾力があり、筋肉があり、骨があり、関節があった。

あくまでも擬態して出来上がったもののようだが、それでも今の私には嬉しい。

人の身長の高さがとても楽しい

この大きさは大体豚人と同じくらいの大きさに174cmある。

因みに私の人間の頃の身長は167cmだ。

少しぐらい大きくなったっていいだろう？

親友と背の順の番号の3、4番を争っていたのは忘れたい思い出である……

さて、先ずはここから一番近い村まで行ってみるとしよう。

人とやっと言葉を交えることが出来る。

楽しみだ。

封印されし聖剣（後書き）

今までの中で一番粗い出来あがり。
もっと頑張ります。

疲弊した騎士。ただし豚。（前書き）

タイトル考えるのめんどくさいけどそれ以上に内容考えるのが難しい。

疲弊した騎士。ただし豚。

どうも、念願になって人型になれた液体です。

現在進行形で二足歩行中です

とっても懐かしい感覚に感動しながら近くの村に向っています。

私はこんなにも歩けることが素晴らしいことだということに全く気付いてなかったことを愚かだ、などと考えながら大地を踏み締める感触が楽しく、ついつい笑みをこぼしてしまった。

それも、現代ならば近づきたくないくらいとびきりのを。

近くとはいえ、神殿からは結構な距離があつたのだが、村にすぐ到着してしまった。

村は心なしか落ち着かない雰囲気が漂っていた。

気になった私は近くにいた人に聞いてみることにした。

因みに発声練習は完璧だ。ぬかりはない。

「すまない、尋ねたいことがあるのだが……」

「んん？兄ちゃん見ない顔だな、ハンターか？こんなとこまでご苦労なことだ」

狩人？

気になるが、今はそれより聞きたい事がある

「旅人だ。……この村に何かあったのか？」

「あん？知らないのか？勇者様が召喚されたんだとさ」

「それがこの村と何の関係があるんだ？」

「ああ、これはあまり知られてないんだっただな。このからまっすぐ行ったところにある森の奥に勇者様専用の聖剣が封印されているんだ」

……絶対あれだ

ちよつと齧っちゃったけど大丈夫かな

あ、そういえば私の分体放ってる。　だけど勇者なら大丈夫だろう

……大丈夫。　うん、気にしない

「で、その聖剣を勇者が抜きに王都からやって来るかもしれないかな、皆いつ来るかとそわそわしてるんだ。　勇者様はかなりの美形らしいから女衆が騒いでな」

「そうだったのか」

聖剣を抜きに勇者がやって来るかもしれない、ということは私もついでに討伐されるところだったのか？危ない危ない、流石に勇者には勝てる気がしないからな。

「最近魔王が復活して魔物……モンスターの動きが活発になってるらしいじゃねえか、兄ちゃん、旅の道中によく襲われなかったな。見たところ丸腰だし危ないぞ」

「運がよかったただけだ。　ありがとう教えてくれて、助かった」

「おう、気にすんな」

もう、魔王は復活したようだ
もしかしたら、魔王復活の影響で私が生まれたのかもしれない。
聖剣齧ったのは何の関係もないだろう。
大体齧ったのは半日前だし。

とりあえず、勇者を一目見ておきたいな……そうだ、王都に行こう

王都は以前場所の確認をしているので方角はわかる。かなり大きな城があったから、近くに行けばすぐにわかるのだが。

行くと決めた私の行動は早く、すぐに村を出ることにした。なにか武器を買っていいこうかと思ったが私はお金を持っていないので諦めた。

王都へ向っていた私は、馬車の残骸が転がっているを見つけた。
化物たちにも襲われたのだろうか、馬車は拉げて使い物になりそうにない。

何かないか気になって周辺を探してみると血まみれの鎧が落ちていた。

鎧にはこの国の王都の城にあった旗と同じものが刻まれていた。
この馬車は多分、王都から来たんだろう。これに勇者が乗っていたのなら場所を移して戦っているか、既に逃走中だろう。

どちらにしろ私にはあまり関係なさそうだ

ドスンッ

ん？何の音だ？

ドスンッ、ズシッズシッ

地響きがだんだん私に近づいてくる
なるほど、これがふらぐというやつか

「ぶふう〜〜、ぶぐつぶぐつぶぐ〜」

振り返ると鎧を着た豚人がいた。ただし、2 m超の
体色も豚人が猪の毛だったのに対し、こいつは白い。

こいつが馬車を破壊したのだろうか、かなり強そうだ。

手にはかなり使い込まれた鉄の槍が握られている。槍には新しい血液が付着していて、先ほどまで戦闘中だったことがわかる。

「ぶごっ！ぶごっぶるうう！！！」

私を発見した白豚は突然いきりたって襲い掛かってきた

突きからの薙ぎ払いだ。かなり早い攻撃速度だったためかわしきれず少し掠ってしまった。

白豚は鉄の槍を振り下ろし、通常ではありえないほどの音が鳴り響き砂埃が舞う。

だが、白豚はそれでも攻撃をやめなかった

「ぶひい！！ぶごっ！！！」

連続で突きを放つ。前が見えないが、突きが風を切る音を頼りに何とか避ける

「ぶぶく？ぶふう、ぶご？」

どうやら私を見失ったようだ。この隙に『分析者』を掛け、あいつの能力を分析する

名前：ナイトオーク

種族：オーク派生種・騎士

性別：♂

状態：疲労・激昂

Level：61

生命力：8000 / 17000

魔力：38 / 38

攻撃力：367 武器攻撃力 + 143 || 510

防御力：326 防具防御力 + 166 || 492

素早さ：213

器用さ：49

賢さ：10

魅力：2

Skill

『槍術』

『刺突補正』

『剛力補正』

『騎士道』

『五月雨突き』

『パワーランス』

『攻撃速度上昇弱』

『初級性魔術』

装備：騎士のやり

装備：騎士の鎧

白豚は騎士豚だったようだ。
そんな事はどうでもいい

今まで武器を装備した化物相手に『分析者』を使った事がないので、武器に補正が掛かっていることを知らなかった。

前に掛けたやつらは武器を持ってただけで戦闘体勢に入ってないやつだったし、一種族につき一度だけしか使ったことがない。とはいえ、同じ種族で違う武器を使うのなんて人間以外にはあまりいないだろうから気にしないでいいのかもしれないが、もし別々の武器を使うやつがいたら気をつけなければならぬだろう。

分析し終わって数秒すると砂埃がだんだんと収まってきて騎士豚の影が見えるようになった。

「ぶごあ あああ！！！」

私の生存を確認した騎士豚はやはり私に向って突きを放つ

私は両手から触手を地面に伸ばし、それを支柱として体を支えて突きをかわす

「ぶごあ！？ ぶぐつ！！ぶぎゃあ？」

頭の悪いやつだ、さすが賢さが10なだけある。

騎士豚は辺りをきよろきよろと見ている。

そして私の触手を見つけた頃にはもう遅い。

私は触手を刀の形に変形、圧縮をさせ、騎士豚めがけて振り下ろす

「ぶひひひひひひ！！！！ぶぎやああああ！！！！！！」

『斬撃補正』の効果と『剣聖』の効果で威力が上がった一撃を叩き込むと、袈裟斬り、逆袈裟と繋いでいく

「ぶひひひひひひひひひひ！！！！ぶごおおお！！！！！！」

騎士豚は苦しんでいたが、途中で痛みを忘れたように私に攻撃を仕掛けてきた

連続で突く『五月雨突き』を発動させたようだ。

騎士豚が疲労しているためか、先ほどよりも技にキレがないが、避けきれず、直撃してしまった。

予想よりも傷を負ってしまった。

『刺突半減』で威力は抑えられているのだが、それでもかなり強い攻撃だ。私の体力の半分を削られてしまった。

騎士豚が疲労していない時に遭遇していたらまずやられていただろうが、こいつとはほぼ互角の戦いだ。

いや、むしろ長引けばこちらが不利かもしれない 相手が攻撃力と防御力を武具で補正されている以上はこちらの技量で何とかするしかないのだから。

「ぶおおおおおおお！！」

騎士豚は大きく鳴いた後、連続攻撃をした。

私は触手で作った刀を使い防御に専念するが、攻撃が止みそうにない。

振り下ろしの時の隙を使い、触手で腕を刺しながら後ろに退いて距離をとった。

そして、『乾坤一擲』を使い一撃で決めるために居合いの構えをとり、近づくのを待つ。

「ぶごっ！！ぶぎいいい！！！」

案の定騎士豚は槍を構えながら突撃してきた

「ぶごおおおおお！！！！！！！」

「ハアア！！！」

息を吐き出しながら機会を見て騎士豚の攻撃が当たる前に抜刀、そのまま横一文字に真つ二つにする。

「ぶるおおお！！！！ぶごっ！！ぶぎいいい！！！！ぶほっ！ぶぐうううう！！！！！」

斬られたことに気付けなかった騎士豚は『パワールランス』を使い、振り下ろしで私の頭を割ろうとしたが、振り上げたときから徐々に体がずれていき、2つに別れた

「ぶう？ぶぎ……？ぶごっ……ぶ……ぶ……」

「ハアッハアッ、つく、つきつついな。少し、疲れた気がする」

騎士豚は死んだことに気付かず『乾坤一擲』『剣聖』『技量補正』の複合によって殺すことができた。

今日は精神的に疲れた気がする……
ナイトオークの屍骸ともっていた武器は回収して、この辺りの安全な場所で睡眠を取ることにしよう

「手負いのナイトオークを撃退せよ」をクリアした

宝回収率：0 / 0

ボスモンスター：ナイトオーク Level 61

ボスモンスター討伐ボーナス：人型擬態が擬人になった

スキル：『擬人』

クリア率100%ボーナス：全熟練度+5

スキル：『危機察知』

Level up

Level：52 ↓ 53 +1

生命力：1082 / 6105 +105

魔力：398 / 430 +32

攻撃力：307 +5

防御力：254 +7

素早さ：441 +6

器用さ：4 1 4 + 2
賢さ：2 1 3 + 5
魅力：1 8 1 + 1

S k i l l g e t

ナイトオークからスキルを吸収しました

N E W 『五月雨突き』

N E W 『パワーランス』

N E W 『騎士道』

N E W 『槍術』

N E W 『剛力補正』 + 2

N E W 『騎士道』

N E W 『攻撃速度上昇』

■■■■は：騎士の槍、騎士の鎧を手に入れた。

疲弊した騎士。ただし豚。（後書き）

とりあえずこの作品を先に進めるために連日投稿する所存です。
書き溜めの貯蔵が尽きるまで……

擬音使ってましたがなんかダサいので消しました。

王都到着（前書き）

話の持っていき方が強引です。
気が向いたときにでも再編集します。
文字数更に増えますが……

王都到着

どうも、騎士豚を倒したものです。

睡眠場所は、近くの木に登って寝る事にした。

朝早くに目覚めた私は水溜りに向かって私の顔を見ながら互換された『擬人』を確認した

『人型擬態』が『擬人』に互換されてより、人間らしく………というより前世の私のような姿になった。

より、人間らしくなったのはいいのだが問題は背丈だ。

実を言うと背丈も前世と同じになりかけているのだ。

折角の高身長の夢をぶち壊された気分だ。

それはともかく、騎士豚の装備はいいのだが、何故か装備しても攻撃力に+がつかない。

あれか？俺に使える武器は触手だけでも言いたいのか？

とりあえず格好だけでもつくので槍は持っておく事にする。

鎧は食べた。

流石に鎧は城の人間にばれてしまう。

王都についたら槍もどこかに売ってしまおう。

そういえば、寝ていた時におかしな声が聞こえた。

———泉に………

そう、こんな声………あれ？まだ聞こえてる

—— 泉に……来て……

泉に？何かあるのだろうか。
興味がわいてきて無性に泉へと向かいたくなった。

その時、私の『冷静』と『沈着』が発動し、頭の中がすっきりしたような気分になった。

そして考える。

どうして場所も知らない泉に行こうとしたのか
どうして私の能力が発動したのか
どうしてこの声は私を呼んでいるのか

私はほとんどの状態異常を軽減できるが今まさに状態異常になっていて、冷静以外の状態になったから『沈着』が発動したのではないかと推測した。

ならばこの声に従うのは危険じゃないのか？

そう考えた私は無視することに決めた。

その時、声が前にも増して強く聞こえ出した

—— 泉へ… 泉へ… 泉、泉、泉…… 早く、来て……

だんだんと恐くなってきたが、状態は強制的に冷静へと引き戻される。

おかげで思考に集中できる。

おそらくこれは私を誘惑していると推測できる。
チョウチンアンコウのように獲物を誘い、獲物に喰らいつくのだ

ろっ。

ここにいては危ないと思い、私は早くここから出る事にした。

—— 泉へ……来て……早く……あなたを……

その声は最後まで紡がれず、私に聞こえる事はなかった……

S k i l l l o s t

『悪&\$道#心』 開放条件を満たせなくなりました。

S k i l l g e t

『善悪の天秤』 - 1 2

走って先ほどいた場所から去った私は特にこれといった事もなく
王都に着いた。

王都には町に入る為の門がある。

金を払い、商人や旅人が身分を証明させるための物だ。
当然私にお金などない。

なので私は少々強引な手段を使わせてもらった。

両手足を触手の状態に戻し、そして、壁を登っていく。

その時『擬態』を使いながら登っているで見つかる事はない筈

だ。

そうして私は王都に入る事に成功した。

何はともあれ先ずは勇者を見に行くために聞き込みをしよう。
前と同じように偶然近くにいた人に聞いてみる事にした

「すまないが勇者ってどこにいるかわからないか？」

「？あなた他所から来た人？」

「ああ、ついさっきこの町に着たんだけ」

「そう、残念だったわね。勇者様なら聖剣を抜きにフィーツ村に向
かっているそうよ」

「そ、そうか……」

勇者を見るためにここまで来たというのにこれでは無駄足だった
のか？

「そう落ち込まないで？この町にいればいつか会えるんだから」

まあ、それもそうだ。

だが私には金も無いため宿も取れないし食べられない。

一番良いのは就職することだがそれにも問題がある。

「あ、そうだ。ねえあなた、もしよければ私のところで働かない？
男手が欲しいの。駄目かしら」

「あ、いや、私は……」

そんな事をいわれても、わたしには身分の証明ができないのだ。
働ける訳がない。

「仕事内容は私のやってる鍛冶屋の手伝いよ。重い物ばかりだから大変なのよ」

「しかし……」

「もしかして長い間は働けないとか？」

「あ、ああそうだ」

困ったわたしは咄嗟に嘘をついた。

別にこの町にいても問題は無い。

「んーそつか。じゃあ、この国にいる間だけでもお願いできない？」

何故私はこんなに誘われているのだろうか。

気になったが、折角の就職の機会を断る理由もないので了承しておく事にした。

金はこれから必要になるからな

……金を貯めてから身分証を買えば良いだろう。

「ほんと？助かるわ。じゃあ着いてきて」

そう言われ着いた所は小さな店だった。

店には目つきの悪い、親友とは違う形のかっこよさを持った男がいた。

「よお、リリー。ん？なんだその男は」

「こんにちは、グレイ。うちで雇う事にしたの」

「ああ？こいつを？何でだよ」

「鍛冶屋って重たい荷物が沢山あるの。それに鍛冶に時間かかるから材料の買出しとかしてくれる人がほしかったからね」

「……っち。おいてめえ、リリーに手出しやがったらぶつ殺すかな」

「あ、グレイ、どこ行くの？」

「クエストがまだ残ってたよ、剣一本買ってくぜ」

……なぜ私はいきなり脅されたのだろうか。

「ごめんなさい、彼はグレイ、私の幼馴染なの。ねえ、グレイに何言われたの？」

「いや、特に何も。リリーに迷惑かけるなよって」

「そう、彼、他の人にもなにか言ってるのよ。何言ったのか聞いてもなんでもないって言われちゃうし……」

これはあれか、恋心というやつか。

ちゃんと伝えれば良いのに……

「さて、自己紹介がまだだったわね。私はリリー。リリー・バレンティンよ。お父さんが死んだ2年程前からここ、バレンティン工房の店主をやってるわ。あなたは？」

「私は……」

なんと名乗るべきだろうか……

解析系の能力を使っても私の名前には霞がかかっているようにわからないのだ。

「私には多分名前が無い」

「多分？」

「昔呼ばれていた名前なら有る」

「じゃあ、そっちで良いから教えてよ」

「中 ■ ■ 木」

「え？ご、ごめんなさい、よく聞こえなかったわ」

「……村雨 忍。特に目的も持たずに彷徨っている」

本名を言ってみたがやはり聞き取れないようだ。

私にも口に出した名前がなんなのかよくわからなかった。

咄嗟に出たのは偽名だった。

「ムラサメ・シノブさん？変な名前ね」

「ああ、いや、正確には忍 村雨、かな。性と名が逆なんだ」

「本当に変な名前ね。あれ？たしか勇者様も姓名が逆だったような

……」

「珍しい名前だろう？」

「ええ、とても」

ここで勇者の情報が一つ増えたな。

勇者は日本と同じような名前が付いているようだ。

この人は多分みんな外国人のような名前がついているから、私には呼びにくくて困る。

「さて、私はここで一体何をすればいいのだ？」

「そうね、まずは……水を汲んできてくれないかしら？」

「水を？どこでだ」

「店の裏に井戸があるわ。そこから5杯一杯に入れてきて」

「……魔法は使っては駄目か？」

「魔法？シノブは魔法が使えるの？」

「ああ、一応」

「ねえ、シノブって魔法使いなの？」

「いや、そんな事はないが……」

「ふうん。でもどうして魔法が使えるの？魔法使いでもないのに……」

……」

「さあ、使えるものは使える、としか考えた事はなかったな……どうしてそんなに驚いてるんだ？」

「だって、魔法使いってなれる人は少ないし、なったとしてもギルドに入るか王国に奉公するかぐらいしか道が無いのよ」

「そうなのか？」

「そうなのかって……シノブ、あなたね……」

「まあ、便利な道具だとも思ってるくらいさ」

「はあ、そうね。じゃあ魔法で水出してくれる？」

「ああ、任せてくれ」

「あ、それと、絶対魔法使えること誰かに知らせちゃ駄目よ」

「問題でもあるのか？」

「まあね。知られたら間違いなく国の人が来て連れてかれるか、ギルドに入れさせられるかのどちらかね」

「……そうか、解った」

魔法が使える人が少ないわけではなさそうだ。

むしろ魔力の無い人の方が少なく、戦士は誰でも魔法で身体強化を自然と見につけるらしい。

だが、水を作り出したりする魔法使いは火力が高く、広範囲の攻撃を出来る事からこの国も獲得に躍起になっているらしい。

もちろんこの国……ふおーすでつど、というらしいが……もちろん例に漏れず魔法使いを見つければ勧誘をしつこくかけ、それを嗅ぎ付けたぎるどもしつこく仲間になれと勧誘されるそうだ。

絶対にばれないようにしなさいと釘を刺された私は仕方なく隠れる場所を探して魔法を使っていた。

「『うおーたー』……『うおーたー』……ええい、『水』……」

さいきん気付いた事は、魔法に必要なのは想像で、詠唱の違いによる影響は今の所なさそうだ。

ただ、関連のある言葉だと想像がしやすい。というだけだ。

わたしは横文字が苦手なので言いづらいが火！といって魔法を使うのはなんだか格好が悪い気がする。

とはいえ、今は誰もいないので途中から水！と唱える事に変えた私はすぐに桶一杯の水を汲み終えた

「ありがとう、助かったわ。ねえ、宿、どこも取ってないんでしょ？ だったら家に泊まってってよ」

「え？ いいのか？」

「ええ、死んだお父さんの部屋が空いてるしね……」

「……それは」

「いいの、気にしないで。お母さんも一緒に住んでるから」

「そうか」

「それに、シノブは目的も無く彷徨ってるって言ってたでしょ？ あの時長い間働けないとか言ってたくせに……」

「あ、いや、それは……」

「ね、やっぱりずっとここで働かない？」

「……考えておくよ」

「うん、いい返事、期待しておくわ。じゃあ、帰りましょ。こつちよ」

泊まる金もないから液状になって隠れて寝るつもりだったのだがリリーが家に泊めてくれるそうさ。

何故かは解らないが働く場所をくれた上に寝泊りする場所も貸してくれるなんて……

これはぐれいが心配する訳だ……リリーは無防備すぎる。

今日会ったばかりの男を家に泊めるなんて事、普通はしないだろうしな。

いつかこの恩は返そう。
絶対に……

s k i l l g e t

N E W 『 恩返し 』

N E W 『 守護 』

N E W 『 能力付与 』

『 善悪の天秤 』 + 2

王都到着（後書き）

連投2日目

設定集出すとか言っておきながらまだ出してない俺。
読まないといろいろわからないところあるのに……

この王都で生きる（前書き）

全ての登場人物の名前に意味は無く、適当に考えてつけられています。

この王都で生きる

どうも、王都の小さな鍛冶屋、バレンタイン工房で働く事になったものです。

現在、リリーが家に泊めてくれると言うのでありがたいと泊まりに行っています。

「お母さんただいま」

「あら、お帰りなさい。……その方は？」

「私が雇ったの。ほら、鉄鉱石とかって結構重いから男手が欲しかったし」

「そうなの、でもどうして家に連れてきたの？」

「えーっと、その、今日この町に着たばかりらしくって、宿取ってないそうだから……」

「あらあら、それは大変ね。しょうがないわね、じゃあ、今日だけよ？」

「ありがと。じゃあシノブ、あなたはお父さんの部屋で寝てね？」

今日一日だけだがここで寝る事を許してもらえた。
当然だ。

ここには女性しかいないのだから、男性を泊めるなんて怖くてあまり出来ない。

一日泊めてもらえるだけでもありがたい。

「それじゃあシノブ、夕飯にしましょうか」

「ああ」

いままで生きたまま食べ、丸々食いつくしていたからこの世界で

まともな料理を食べるのは初めてだ。

期待が胸いっぱい広がったわたしの前に出された料理は形容し
難いグロテスクな一品だった。

食えないだろ、これ。

「どうしたのシノブ？食べないの？」

「い、いや食べる」

……唾液を酸にして溶かしながら食べば大丈夫の筈。

…南無三！

「…………意外と美味しい」

「ふふん、当然よ。私が作ったんだから。それより、意外とつてど
ういうことよ」

そう、美味しかった

美味しいのだが、見た目が食欲を衰えさせてしまうのだ。

「い、いや別に……ただ見た目が……」

「う……それは言わないでくれる……？」

気にしていたようだ。

一体何を入れればこんな見た目になるのだろうか。

それにしても料理を食べ終わってもあの頭に響いてくる声が聞こ
えない。

料理では能力を得られないということか？

強さを求めていたなら娯楽の少ない生き方になっただろうな。

食は娯楽でもあるからな。

「シノブ、明日は早いわよ。さあ、早く寝ましょう?」

「ああ、そうするよ。いつごろには起きてたらいいんだ?」

「そうね。日が昇る少し前かしら」

「ああ、わかった。じゃあ、おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

明日に備えてリリーは早く寝るようだ。

私に睡眠は精神的な疲労がない限り必要がないので夜更かししても何の問題もない。

が、念には念を入れ、早く寝て早く起きよう。

しかし私にはまだやりたい事があったのだ。

それを夜の間にやっておこう。

私の分体は私の半分の力を持ち、私の体に戻ってきた時、その分体の記憶が私に引き継がれるという性質を持っていた。

昔読んでいた漫画のような能力だが、それよりも凶悪で、弱くて、強い能力だ。

最初は分体は弱いが、私と同じように成長して強くなる。

途中で誰かに倒されれば記憶や経験はもらえないが、私の元へ帰還できた場合は、私はその分体の経験をもらえることになる。

このことに気付いた私は早速分体を2体ほど生み出し、擬人させた。

1人は遠藤海斗^{えんどうかいと}、もう一人は小林宙^{こばやしそら}。

そして、自動操縦を一旦切り、遠隔操作で擬人させた聖剣の守り

をしている分体、はただまもる 畑田衛。

この3人は特別製で有る程度自分の考えがあり、目的を達成するためにどうすればいいか考えて行動する。

もちろん、私には刃を向けることは出来ない。

と、いうよりも同じ存在であるため、自殺をしようと思うほど馬鹿ではない。

ちなみにこの三人の姿と名前は高校時代の友達のもので、容姿を思い出しやすかったからだ。

親友になるのだけは私がなんとなく許せないからそれを除いてだが。

3人にはそれぞれ役目を与えた。

遠藤にはギルドに入ってハンターを、小林には世界中を廻って情報収集、畑田は現状維持。

そして私はこの王都で鍛冶屋の手伝いだ。

私が一番簡単な仕事だと思うがまあいいだろう。

小林と遠藤は暫く一緒に行動を共にするそうだ。さっそく家から抜け出して同じ方向へと走っていった。

畑田は……毎日雑魚をくらっているらしい。もうそろそろ私を超えてしまってもおかしくはないだろう。

これに勇者が勝てるか心配だったが。

いろいろなことを分体に任せて、私はほのぼのとした生活を送ろう。

私の『擬人』は滅多なことでは解けない。
心配することはほはないということだ。

分体を作って命令を与えるだけでやりたいことは終わってしまったので、今度こそ寝ることにした。

「おはようシノブ、いい天気だね」

「おはようリリー、いい天気といったかったけど暗くてよくわからない」

今は大体3時頃。

空は真っ黒。星が瞬いているような時間。

そんな時間にいい天気といわれても返事に困ってしまう。

「ちゃんと乗ってくれないと困るわ、ほら、準備して。お仕事お仕事」

朝から元氣なリリー。

私には基本睡眠が必要ないので起きられたが、普通の人なのになんでこんなに早起きできるのだろう。

前世の私は未だに布団に包まっているような時間なのに……

といっても職が違ってから当然なのかな？

でも、こんな朝から始めて、18時頃終わるなんて労働法違反しまくってるよ。

「何ボーっとしてるの、さっさとしなさい」

「ああ、今行く」

この体に睡眠がなくなくてよかった。

あれば眠くて仕事どころではなかった。

何はともあれ今は仕事に専念しよう。

魔王だの勇者だのは全部終わった頃に私の分体が教えてくれる筈だ。

倒されたら私にはわかるからな。

この新しい生活が何年続くかわからないが、私の正体がばれるまで……その時まで私は人間と一緒にいたい。

さあ、仕事を始めよう。

この世界で……私は生きる……！

「リリー、私は今日、何をすればいい？」

「今日はね……」

この王都で生きる（後書き）

私の人生？はまだまだ続く

ご愛読ありがとうございました。

寝先生の次回作にご期待ください！

打ち切りEND

嘘だけど。

次回からは親友を主人公に据えて話を進めていきます。

そうしないと1年後といった表現を使わざるを得ない状況に陥ってその間に起こる魔王と勇者の戦いの描写が無いため意味不明になるからです。

別に遠藤視点でも、小林視点でも良かったんだけどね。

僕の心は……（前書き）

お待たせしました。

いや、1週間ぐらい空けたただけなんだけどね？

柚木の親友の話です。

あの液体？ああ、あいつなら鍛冶屋でいい汗？掻いてるんじゃないの？

僕の心は……

やあ、初めまして……僕はたかはらゆう高原優。今は32歳、独身だよ。
今度の章の語部を任されてるんだ。

ふふ、この歳で独身なんて笑っちゃうよね？

高校生の時までは好きな人が居て……いつも傍にいて……。
なのにその人、どこかに行っちゃって。

探しても探しても見つかんなくて……

家に引き籠ったり、自傷したりしたんだけど、やっぱり彼に会いた
いって気持ちが止まらなくて。

それでやっと地元から離れた県で就職。

そこまで立ち直るのに5年もかかった。

僕が高校時代から卒業して彼が居なくなり、再び逢ってまた引き
裂かれて……

そして僕が彼と再会するまでの道程を綴った。

これはそんな僕のお話。

「やつほー。おはよう柚木。朝から元気ないね」

「ああ、おはよう嵩原。いやー昨日は彼女が寝かせてくれなくて……」

……

「彼女居ないのに何言ってるの……ほら、行こ？」

「なんだとう。俺だって彼女くらい作れるわボケー！」

「はいはい」

彼の名前は中西柚木。

彼女居ない暦〓年齢で、僕の唯一の親友。

彼との出会いは中学の時からだけど、僕が彼に好意を抱く理由を説明するには僕が小学生ぐらいまで遡らないといけないだろう。

僕は子供の時から男の子だった。

他の男の子と一緒に遊び、おままごとなんて女の子の遊びだっていつて男の子を泣かせたり……

お風呂は男風呂に入り、着替える時もそうだった。強くなりたいと思っていろんな道場に通っていた。

僕のランドセルは黒だった。

皆が坊主頭の中僕だけショートヘアだったけど、男の子だった。

小3で髪の毛を伸ばすのが流行った。

僕は髪の毛を伸ばした。

そうしたら女の子見たいだっって言われた。

水泳の授業で僕だけ一人で着替えるようになった。

僕は男の子にあるものがないから……

たったそれだけの理由で男の子じゃなくなった。

小6になると僕はクラスの人の殆どに無視されるようになった。

男か女かわからない。

俺と付き合ってくれ。

関りにくい。

そっいわれた。

僕は男の子だから、男の子と付き合ったりはしないんだよ？

そういつたらついに皆が僕を無視した。

後から知ったけどその子は学校で一番人気があつて、テレビにも出てる子役の子らしい。

だから僕は女の子から苛められ、男の子から無視された。

中学生になつて僕は遠い遠いところに引越した。

僕が苛められている事を先生がお母さんとお父さんに教えたらしい。

中学生になつても苛められたら大変だからっていった。

このころから僕は病院に通うようになった。

僕には病氣があるらしい。

性同一性障害

それが僕の病氣の名前。

女の体に男の心。

そして僕が体育の時間の時、着替えるのが嫌でずっと休んでいるのを同級生の男子に怒られた。

怖かった。

格闘技をやつてても、どんなに強いといわれても、人に嫌われる恐怖に勝てなかった。

僕は泣いてしまった。

その次の日、泣き虫と言われるようになった。

上級生に好きな子をお前に盗られたと怒鳴られた。殴られそうになつて、必死に許しを求めた。

その日、僕のお小遣いはなくなつてしまった。

でも……

半年後、僕はパシリと呼ばれるようになった。
ジュースやパンを10人分僕のお金で買ってこないと怒られるんだ。

今日は11人分買ってくるように言われた。

「お、来たな。どれどれ……」

「カレーパン頂き！」

「じゃあ俺クリームパン〜」

「あ、ずりいぞお前ら」

「早いもん勝ちだつての」

当然、そこに僕の分はある訳がなくって。

僕は半年間ずっとお昼ご飯は食べてなかった。

お金も貯めてたお年玉から使っていた。

そろそろそれもなくたってきていて、お金が払えなくなる。

「柚木、食べないのか？タダだぜ？タダ」

「……………」

「おい、どうした？いらなら俺が食うぜ？」

どうやら知らない1人は柚木というらしい。

柚子君は地味で同級生だつてことすら知らなかった。

「いや、貰つとくよ。じゃ、ジンジャエール貰つてくぜ」

「あ！俺の好きなやつ取りやがったな！」

「早いもん勝ち……なんだろ？…ああ、私はやっぱり教室で1人で食べることにするよ」

「えゝまたかよ。お前小学校のときもそうだったじゃんかよ」
「すまん」

「許してやつからジンジャエール置いてけ」

「やだ。じゃあな」
「おう」

柚木君は一人で食べるらしい。

僕はここに残って足りないって人の分のパンを買って来ないといけないけど今日は違った。

「おい、髙原。お前今日はもういいぞ」
「……え？」

「柚木のやつが2つしか持ってたから結構残ってるんだよ。さっさと失せるパシリ！」

僕は教室に向かった。

けどその途中で彼に呼び止められた。

「なあ、お前……髙原だっけ？髙原……さ。嫌なら嫌って言うていいんだぜ？」

そう、柚木君だ。

「でも……そんなことしたら……」
「殴られるってか？大丈夫だ。その時は私が……一緒に殴られてやる」

私、喧嘩弱いんだよね。と笑いながら言われた。
物凄く格好悪い言葉だけど、凄く嬉しかった。

「ほら、パン食えよ。お前のなんだから……ほれ」
「……あ……」

「ジンジャエールは……回し飲みでいいか？俺も飲みたいし。な、」

嬉しくて、涙が溢れてきた。

けれど、何故だか彼にだけは見られたくなくて俯いた。

こんな気持ちになったのは初めてだった。

その日、僕は心の底から笑った。

それから僕はなんだかおかしい。

中西君…… 柚木君の苗字だけ。

中西君は僕の斜め前の席で、僕が前を向くと彼の横顔がチラッと見える。

中西君を見ていると胸がドキドキして、締め付けられて、切なくなる。

彼が女の子と話している姿を見るのは苦痛だった。

彼の傍にいと嬉しくて、気持ちがよくて、楽しくて……

彼と話していると体がだんだん熱を帯びてくる。

僕はどうかしたんじゃないかと思ってお父さんに相談してみた。

それは恋と言づらい。

僕は彼に恋をした。

僕は恋が嫌いだ。

こんな物のせいで僕は彼と上手く話すことが出来ない。

その3日後、僕のおまたから初めて血が流れた。
保健の授業で習った。

これは生理。

女の子に起こる生理現象。

僕は焦ってお母さんに助けを求めた。

その日は学校を休んでお母さんがお赤飯を炊いてくれた。

……お赤飯はあんまり好きじゃない

次の日、体が重かった。

その日も学校を休んだ。

そして次の日、学校に行くと言をかけられた。

彼かと思つて振り返ると

「よお高原。何勝手に休んでんだよこの野郎。ぶつ殺すぞ！」

「お前が休んだせいで昼飯抜きになつたんだぞ？ああ！？」

僕の心は一転、雲がかかったようだった。

彼じゃなかった……

苛められることを心配するよりも彼じゃなかったことを考えるなんてやっぱり僕はどうかしたんじゃないかと思つた。

でも、そんなことを悠長に考えてる場合じゃなかった。

「なに無視してんだこのパシリ野郎！！」

「テメエは黙つて頷いてりやそれでいいんだよ！！」

「この屑！！」

「そうだ！この屑！！バーカ！！！！」

「死ね！この野郎！！」

僕がいろんなことを考えていたら皆が僕に悪口を言ってきた。

怖い……

助けて……

嫌だ……嫌だよお……

「たすけて……」

「ああ？何言つてんだ聞こえねえよ」

「……たすけて」

「ぼそぼそ喋りやがって。気持ち悪い」

—— 柚木君…… 助けて

「助けて！！僕、もうやだよ！！助けてよ！！」

「ucci。ぴーぴーうっせえなこの野郎！！！！」

殴られる！

そう思い体が強張ったとき、僕と同じくらいの背の男の子が僕の前立っていた。

僕の心は……（後書き）

親友のスペック

強いけど、心が弱い

柚木のためなら人殺しも出来る。

ヤンデレ気味だけれど違います。

ボーイズラブ要素はこいつのせい。

柚木はこいつを男だと思っているので……

柚木のいない世界（前書き）

第二章の冒頭です。

柚木のいない世界

「いつてー。お前本気で殴りすぎ……」

「おい柚木。なんでそいつ庇ってんだよ！」

「んー？ああ、私ってこういうの見過ごせない性質らしいね。ふはは、私、ひいろう見たいだろう？」

「……柚木。お前も俺達のパシリになりたいのか？」

「いや、別に」

「……ぶっ殺す……」

「おおおお？物騒だなおい。暴力はやめ……」

中西君が僕を助けに来てくれた。

嬉しい。嬉しいな。嬉しいよ。嬉しいな。

僕は安堵した。

でも、彼は言っていた。

喧嘩は弱い……と。

僕がそのことに気付いた時、彼は既に殴られ、蹴られ、何人かりかで袋叩きにされていた。

彼は血まみれになっていた。

それを見た時、僕の頭に血が上った。

生まれて初めての怒り。

今になって考えれば彼と出会ってから初めてのことばかり起こる。

彼を痛めつけていた男の子にそれぞれ空手の正拳突き、柔道の一本背負い、合気道の小手返しを使い倒していく。

彼を押さえつけていた男の子も倒して、彼の無事を確認しようとする。と背後に気配がした。

後ろを見ると、最後の一人が飛び蹴りの体勢に入っている。

今からではもう間に合わない。

目をつぶった僕はいつまでも衝撃がこないことを不思議に思った。再び目を開けたとき僕の目に映ったのは血まみれの中西君だった。

僕なんかのことを身を挺して庇ってくれた。

僕なんかの為に大怪我をした中西君。

その後、僕を苛めていた子は皆転校していった。

中西君は4ヶ月くらい入院した。

その間僕は独りだった。

彼のいない学校なんて行きたくなかった。

でも、僕は学校に行った。

彼の分のノートを書かないと……

中西君は喜んでくれるかな？

中西君のお見舞いに行きたいといって先生に聞くと教えてくれた。僕はほぼ毎日彼のいる病室に行った。

「よお、元気か？」

「うん……いや、全然。それより体大丈夫？」

「おお、なんか肋骨とか折れてるらしくってさ、じっとして待ってるだけだし」

「顔とか酷いよ……？」

「ほっとけ、そっちはすぐ治るらしい」

「そっか」

よかった……

そして何日かが経った時。

いつものように彼の病室に行くと彼は眠っていた。

僕はその無防備な顔を眺めたくて近づいた。

するとだんだんと心臓の動きが早くなってきた。

気がついたら僕の目は彼の唇に釘付けになり、勝手に体が動くようになった。

僕はなんだかいけないことをしている気分になり顔が真っ赤になっ
て死んでしまいそうだった。

でも、僕の顔は彼に向かっていつている。

……そしてついに彼の唇と僕の唇は重なった。

その時、突然彼のお母さんがやってきた。

見られている。

それはもう物凄く。

「……………お邪魔しました……？」

「……………あ、あの………」

「……………」

「……………その……………中西君には……………黙っててくれませんか……………？」

「女……………の子……………？」

「……………はい……………」

「なるほど……………ついに柚木に春が来た……………と。寝込み襲うなんてやるわね……………」

「……………わ、わ、わ、襲ってなんか……………」

「……………いいのよ隠さなくて。ふふ、柚木のことよろしくね……………」

「僕は彼の彼女じゃないんです。それに僕、男の子ってことになっ
てるから彼は女の子だってこと知らないんです……………」

「へえ……………そうなんだ。で、いつ結婚するの……………」

「……………け、け、結婚なんて……………」

「息子の唇奪つ……………といて、なに動揺してるのよ、初心な子ね……………。若い……………」

つていいなあ」

見られてしまったとき、凄く恥ずかしかった。
結婚なんていわれてもつと恥ずかしかった。
彼との思い出は恥ずかしいことばかり。

彼が退院してからは、僕は中西君のお母さんに中西君を迎えに来るように頼まれて一緒に登校するようになった。

僕は彼にべつたりとくつついてた。

僕は女の子だったけど皆には男の子だってことにしてるから同性愛じゃ無いかって噂が流れたりした。

僕が女の子だって知ってる保健の先生が止めてくれたけど噂は結局クラス中に広がっていた。

彼が女子生徒たちにそれを聞かれて避けられた時はちょっと嬉しかった。

だって彼に近づく女の子が少なくなるってことだから。

僕は男の子の格好してるから女の魅力なんて全然ないんだもん。

……こんな事考えてるなんて知られたら彼に嫌われちゃうかな？

僕達が高校生になってからは僕は女の子達に人気だった。

男の娘ーだとか言われて、一緒に遊ばないかって言われたけれど皆断った。

だって僕は中西君の傍にいないと……

柚木君なんて名前で呼ぶようになった。

でも彼はそんな僕の努力に気付いてくれない。

いつか女の子だって教えたなら気付いてくれるのかな……？

それから柚木君は女子に苛められるようになった。

女の子には負けないだろうが手を上げる訳にはいかないって言うて中西君は抵抗しなかった。

僕は男子からも告白されるようになった。

柚木君の友達の遠藤君、小林君、畑田君から可愛すぎて生きていくのが辛いなんて言われたりした。

柚木君がそう言うてくれたらいいのに……

僕は日に日にやつれていく彼が見ていらなくて僕は女子達を説得した。

「柚木君苛めるのやめてくれませんか……？」

「苛めてないよ、私たちは彼方を助けようと……」

「だから、やめてください」

「……だいたい、なんであんなにあいつに引っ付いてる訳？
気持ちわる」

「僕は……」

「あいつ、あんたが女っぽいからって傍においてるどつてー野郎なんだから近寄らないほうがいいよ」

「嫌です！ー！」

「……は？」

「僕は、僕は彼が好きなんです！ー！」

言ってしまった。

この日から苛めはなくなって、皆からは温かい眼差しを向けられるようになった。

先生以外は僕が女だっことを知らないから同性愛だっと思ってるけど。

僕は女に産まれてきてよかったって思っていた。
だって彼と結婚できるかもしれないから。
彼女でもないのにそんなことを考えていた。

——そして、彼がいなくなった。

卒業して彼は大学にも行かず、就職先を探すと言っていた。
でも、突然いなくなった。

彼のお母さんに聞いてもわからなかった。

僕は目の前が真っ暗になった。

僕は絶望した。

泣いた。

獣のように啼いた。

声が枯れ果てようとしても、泣いた。

僕は家に引き籠るようになった。

お母さんとお父さんはやっぱり……というような顔で僕を見ていた。

5年間働かず家にいて泣いてばかりの僕は彼を諦めようとして、
職を探した。

僕が見つけた職場はここから遠く離れているところだ。

僕は男として就職した。

誰にも気付かれないようにした。

僕にはたぶん才能があった。

23歳で就職し、数年が立った時、僕は結構な地位の人間となった。

女の人にライバル社の人たちと飲みに誘われたりしたけれど断った。

僕の家には彼の写真が一杯だった。

笑顔の彼、泣いている彼、怒った彼、悔しがる彼、楽しそうな彼、格好良い彼。

僕は見ているだけで幸せになれたけれど、虚しくなった。

32歳になって飲みに誘われたある日。

同僚の男の人がライバル社の中西って奴は良い奴だと言われた。

僕は気になってその人の名前を教えてもらった。

その人の名前は中西柚木。

彼と同じ名前。

僕は中西柚木さんを追いかけた。

酔っ払っているみたいで、ふらふらしていて、スーツは草臥れていたけれど、彼の後姿とそっくりだった。

彼が横に曲がる時、彼の顔が見えた。

柚木君だ。

柚木君みーつけた。

見つけた。

ようやく見つけた。

なんて話しかけようかな？

僕が女の子で柚木君が好きだって教えなきゃ。

それから、それから……

僕は彼に近づく度に頭の中が真っ白になって何も考えられなくなつた。

悔しくて、少し驚かせようと思って、立ち止まっていた彼を後ろから突き飛ばしてから起こってやろうとした。

けれど、僕が突き飛ばした次の瞬間、彼は車に轢かれてぐしゃぐしゃになった。

車はそのまま逃げていった。

——え？

彼が死んだ。

認めたくない。

彼が死んだ。

嫌だ。

彼が死んだ。

助けて柚木君。

——カレハモウイナイ

僕の心は壊れてしまった。

彼のいない世界で生きていたくない。

彼の写真を何枚も焼き増して部屋に貼り付けた。

でもこんなことじゃ僕の心は元に戻らなかった。

会社も辞めてしまつて僕は彼の写真を持ったまま飛び降りようとした。

そのときだった。

「君、ちょっといいかな？」

「……邪魔しないでください」

邪魔だ。

僕は柚木君がいったあの世に行くんだ。
彼に逢いたい。

「死ぬんだったら、運命を捻じ曲げてみないかい？」

「……………」

「この籤引き、運がよければ死んだ人でも生き返るんだが……」
「っ！！本当ですか！！」

ありえない話だと思う。

でも、僕はこのとき冷静な判断が出来ない状況だった。

僕はこの話を信じ、彼の写真を抱いたまま、籤を引いた。

『勇者召喚』

そう書かれていた。

がっかりした。

僕はやっぱり死のうかなと思った。

でも……

「ほう、中西といい、君といい。妙な運命だな」

「……彼を知ってるんですか！？」

「ああ、あいつなら君のいく世界にいるよ。まったく、面白い奴らだ」

そういわれた瞬間足元が光り。

気がついたときにはわけのわからない場所にいた。

あの人はなんていった？
この世界に柚木君がいる。
また逢える。
まだ、間に合う。
彼を探そう。
そう、胸に誓った。

柚木のいない世界（後書き）

柚木の後を追って自殺しようとしていた優。

籤引き屋がいなければ即死でした。

ヘルメットをしてなければ即死だった人のように。

召喚された美男子（？）（前書き）

優は頭がいいのです。

ただ寝の頭がよろしくないなので馬鹿に見えるだけなんです。

召喚された美男子（？）

「おお、成功だ！！」

初めて聞いた声は男の人の声だった。

「あの、ここは一体……？」

「勇者様、説明は後です。まずはご自身の力を調べましょう」

そこからは何が起こったのかあまり覚えていない。

ただ、頭に響くような声が聞こえてきて力が湧いてきたのは覚えている。

Skill get

NEW 『勇者』

NEW 『カリスマ中』

NEW 『恋する乙女』

NEW 『初級魔法』

そして、気がついたときには鎧を着せられて、王様に会うように言われた。

「王様、ですか？」

「はい、先ほどからお待ちしております」

男の人に問答無用で連れてかれた。

王様はいかにもって感じの威厳のある厳つい顔に顎鬚の老人だった。

た。

「ほう、そなたが求めに応えし勇者か」

「……え？あ、はい。そうらしいです」

「そうか。女子のような顔つきをしておるがさぞ強いのであろう」

「あ、あの！」

「む、なんじゃ？」

「僕は何で呼ばれたのですか？」

「……説明をしておらんかったのか？ふむ、ならば説明しよう。クルエル」

「は。……勇者様。あなたが呼び出されたのは魔王に対抗するためです。魔王は過去にも現れ、魔物を操り我々人間を殺していったのです。そして我々は魔王に勝てる者を呼び出そうと神から魔法を授かったのです」

「それが……」

「はい。『勇者召喚の儀』です。この召喚術は勇者様の同意なしに呼び出してしまいます。なので、勇者様がこのお話を断つても構いません。再び別の勇者様をお呼びいたしますので」

「別の人に……？」

「ええ。ですが、この世界に勇者と魔王は1人だけと決まっているのです。『勇者』のスキルを持つ方は1人だけしか存在できません」
「断つたら殺すつもりですか？」

「……良い返事を期待しております」

「……わかりました。勇者になります」

「説明は終わったか？」

「ええ」

「そうか。では勇者よ、これより暫くの間はこの国で訓練を受け、力を蓄えよ」

「1つだけ、お願いがあります」

「……申せ」

「人を探しているんです」

「探し人か。名は？そもそも異世界であるこの地にいるのか？」

「はい、います。名前は中西柚木。僕の大切な人です」

「よかるう。では、手配しておく」

王様との会話は緊張した。

頭下げなきゃ、とか。

敬語使わないと駄目かな？とか。

でも、すんなりと終わった。

柚木君を探してもらえるみたいだし、良かった。

「勇者様。こちらへ……」

謁見の間から出るとクルエルさんに呼ばれた。

訓練場でどの程度戦えるのか調べるらしい。

結論から言えば、僕は勝った。

勝利といって良いのかわからなかったぐらい圧勝だった。

兵士200人とかいってたけど、皆僕に攻撃を当てることすら出来ないで投げられた。

相手の動きが良く見えた。

力の流れが簡単に掴めた。

今まで出来なかった動きがいとも容易く出来たのだ。

合気が実践でこんなに使えるものだとは思わなかった。

合気道は実際に戦ったら空手のほうが強いのだ。

「見事です勇者様。200人も兵士を吹き飛ばすなど……どのよう魔法を使ったので……？」

「え……ただの格闘技ですけど……」

「な……！……それは素晴らしい。それでは次は武器を持つての訓練です。私自らお相手致しましょう」

次の訓練は武器を使うらしい。

でも、僕の得意な日本刀はなかったので仕方なく剣を持った。

「さあ、始めましょう！」

クルエルさんが斬りかかって来る。

刃は潰してあるけれど痛そうだ。

今の私にはその攻撃がゆっくり見える。

流れに合わせて擦れ違いざまに斬り付ける。

「ッグー！やりますね。さすがは勇者様です。ですが私はこの国で一番強いのです。負けてはいられません！」

クルエルさんは強いらしい。

でも、僕には弱く感じる。

僕は攻撃を受け流し、背中を斬りつけ、首に剣を突きつけた。

「……なんと……お強いですね。完敗です」

「降参……という意味ですか？」

「ふふ、……はい。参りました」

クルエルさんはとても弱かった。

もしかしたら僕が強いのかもしれないけれど。

僕が強くなってるんだとしたらきっとスキル『勇者』のせいだと思っ

「素晴らしいです、勇者様。これならば直ぐにでも魔物を退けられるでしょう」

「はあ……」

「おそらくですが、7日後には勇者様のパーティの選抜が終了して、すぐにでも聖剣を抜きに行くことが出来るでしょう」

「聖剣ですか？」

「はい。聖剣は勇者にしか抜くことも扱うことも出来ずに、聖剣を持った勇者は更なる力を得ることが出来るそうです。勇者様は今よりもずっと強くなれることでしょう」

どうやら僕はこれ以上強くなるみたいだ。

クルエルさんってこの国で一番強いらしいし、そんな人を無傷で倒せる僕がもつと強くなっても勝てないほど魔王は強いのだろうか。

「それでは勇者様、今日はもう疲れたでしょう。侍女をお呼びしますので少々お待ちを……」

今日は色々な事があり過ぎた。

僕は部屋に案内されてすぐに眠りについた。

柚木君。

必ず、君に会いに行くからね。

召喚された美男子(?) (後書き)

彼を探すために勇者となつて魔王を倒すストーリーの始まり……

優が強い理由は『勇者』のスキルのおかげではないです。

それだと柚木を更に強くしてしまうので条件付の強化スキルです。

特別ハンター（前書き）

柚木編にでたハンターについての説明回

特別ハンター

次の日、訓練場に来なくてもいいといわれた僕はこの世界について調べていた。

この世界の名前はダイナミックナ。

世界は5つの大規模な大陸で出来ているらしく、大陸ごとに国が一つあるらしい。

北のフォースデッド大陸
最果ての国

南のビガレント大陸
魔法の国

西のケヴィワエル大陸
自然の国

東のメガ大陸
武力の国

中央のフォンジング大陸
中央の国

フォンジングは魔王に乗っ取られてしまっていて北と南、東と西の交流が難しくなってしまうている。

大陸の名前が国の名前になっていて、フォースデッドが最果ての理由はどの大陸からも遠い場所にあるからだ。

魔法の国は魔法使い達の研究が盛んな国で、魔法具の開発が進んでいるらしい。

魔法具は僕の世界で言う電気やガスのようなもので、あるとかなり便利らしい。

ビガレントはフォースデッドと一番遠いところにあるのでフォースデッドに魔法具はあまりなく、あってもこの城に2、3個使われているだけだ。

自然の国は森に囲まれている国で主に精霊や亜人が住むらしい。戦争をしている中央や東と南とは交流を持たないが、戦争をしないこの国とは貿易を行ったりする。

戦争をしない国でクルエルさんが一番強いらしいが自然の国の兵士相手だと200がかりで負けるらしい。

つまりクルエルさんは強くなかった。

というよりこの国の人たちは皆そこまで強くないようだ。

武力の国は戦いには何でも使う国だけど人質をとるような卑怯なことはせず、正々堂々ズルするらしい。

毎年武闘大会を開いて最強を決めていて、優勝者には賞金を出しているそうだ。

中央の国は中央にあるため、いろんな人たちが立ち寄る国だ。

中立を保ってはいるが、昔は戦争をしていたので自然の国からは人はあまり来ない。

魔王に乗っ取られてからは流通が滞ってしまい貿易が難しくなっている。この国は南の国とまったく交流が出来なくなっているらしい。

この世界には魔物と呼ばれる化物がいて、一番弱いゴブリンは1匹で人間の子供を殺せる程度の力しか持たないが運が悪ければ大人でも死ぬことはあるらしい。

逆に一番強い魔物は最強種と呼ばれる5体の災害級の魔物で、好

戦的ではないものが4体、残りの1体は人をあまり襲わないものたまには襲う。

最強種の主食は他の魔物や魔力で、過去に魔力を供給する代わりに勇者と共に魔王と戦った魔物もいると聞いた。

この国の資料にはこのくらいの情報しかなかった。

柚木がこの国にいれば他の国にいる筈。

他の国では今は魔王討伐の為に戦争はしてないけれど危険が多いらしいから早く見つけないと……。

資料室で調べ物が終わった頃、侍女の人が来た。

「勇者様。王都に出てみてはどうですか？」

王都とは国にある都市の名前で、この国の城下町の名前だ。

治安はそこそこいいらしいけれど、それでも罪人はいるらしい。

罪人と戦うためにクルエルさんたち兵士が訓練を欠かさずしているそうだ。

「城下町にですか？」

「はい。勇者様のことは既に民達は知っています。御顔を拝見したいと考えるものは少なくない筈で御座いましょう」

「でも僕、お金持っていないですよ……」

「そう仰られると思ひましてクルエル様から3000円ほど預かっております」

「円……ですか」

何でもこの世界の通貨は初代勇者が発案し、2代目勇者が普及させたものらしく、3000円は一般人が働いて1ヶ月で稼げる値段

だそうだ。

ちなみにクルエルさんは1月1万、侍女さんは1月7000円である。

物価が地球よりも安いなあと思った。

紙幣を造る技術はよくわかってないみたいだけど造れるからいいだろうとのこと。

紙幣の偽造は解析できるものでないと無理らしい。

クルエルさんから頂いたお金を持って侍女さんと一緒に町に出るといんな人に顔を見られた。

「あれが……」

「スッゲー、勇者様だー」

「キヤー！こつち向いてー！」

何で僕が勇者だつてことがわかるんだろう。

疑問に思っている僕が着ている服が王様に認められた人で無いと着る事の出来ない服だからだと教えてくれた。

暫く歩いていると侍女さんにギルドに入るように言われた。

ギルドに所属している人はハンターと呼ばれ、ハンターは入国の時に金を取られないとかいろんな特権があつて便利だから入っておけとのこと。

どうせこの国を出る時に入らないといけないらしいので入っておく。

ギルド内は酒場のように沢山のハンターが飲み食いしに来ている。僕と侍女さんが入ったとき、睨まれた気がするけど、気にせず受付の人に声をかけた。

「すみません。ハンターになりたいんですけど……」

「新規加入のか……た……。すみませんが少々お待ちください」

こちらを見るなり奥のほうに引っ込んでいった。
しばらくすると奥から受付の人と一緒に若い男の人が来た。

「初めまして勇者殿。わたくしはギルドフォースデッド支部長のタオといえます。よろしく」

「あ、はい。高原です。よろしくお願いします」

「嵩原殿？不思議な名前ですね」

「あ、この国の人たちって姓名逆なのかな？」

「？つまりユウ・タカハラということですか？」

「はい。たぶんそうです」

「そうですか、覚えておきましょう。それでは本題に入ります。
…王から勅命が来ております。貴方を特別ハンターとして認めましょう」

「特別ハンターですか？」

「はい、特別ハンターの権限はクエストのノルマを達成しなくともハンターの特権を使えます。更にはA級ハンターと同じ権利を得ることが出来ます」

「A級とか言われてもわからないんですけど……」

「そうでしたね。それでは説明をしましょう」

ハンターについての説明はこんな感じだった。

ハンターは1年に規定の難易度のクエストを達成させることで所属し続けられる。

達成したかどうかはギルドの発行するギルドカードに表示され、証明書の代わりにもなる。

紛失した場合は再発行に5万円とられ、G級ハンターからのやり直しになってしまうので大抵の人が紛失防止魔法をかけてもらいに

魔法の国に一度立ち寄るらしい。

一定の難易度のクエストを達成させるとランクが上がり、色々な権利が増える。

ランクはS級、A級、B級、C級、D級、E級、F級、G級があり、S級ハンターはまだ現れていないので事実上最強のハンターはA級だということ。

G級は入国が無料になり

F級はギルドからクエストを達成した際に酒を5杯まで貰える。

E級からは宿代が3割引で、

D級はどこかの国の市民権が貰え、

C級からは特別クエストを受けることが出来る。

B級は宿代が無料になり、どここの店でも一食なら無料にしてくれる。

A級はどこかの国の永住権が貰え、家を建てる事が許可される。S級は、今まで現れた過去がないため解らないが、一応国王と同等の権力を持つことが出来るらしい。

特別ハンターは例外中の例外で、無名の人物がA級と同等の実力がある場合、ギルド長の判断によって決められ、そのためのクエストを達成させなければならない。

ちなみに無料で使える、もらえるもの、割引等は、その実はギルドが負担しているとのこと。

ハンターたちはそれぞれ、パーティを組むことができ、協力することと魔物を倒すことが出来る。

一度に組めるパーティは5人まで。

パーティが変わることは基本ないらしい。

というのも、コミュニティというグループに所属した人がコミュニティ内の人とパーティを組むからだ。

コミュニティにもハンターのようにクラスがあって、ランクが高

いと、コミュニティの建てる事が出来る拠点の維持費を払わなくてもいいようになるとのこと。

「説明は以上です。貴方に受けてもらうクエストは、「魔王討伐」です。難易度はA級、もしくはS級です。ああ、言い忘れていましたが特別ハンターの方はコミュニティに参入不可となります。何か質問は御座いますか？」

「あの、仲間が出来るって聞いたんですけど……」

「その方達はあなたの臨時パーティとして扱われ、貴方と同じ権利を一時的に得ることになります。仲間の方が出来た際にはこちらに一度声をかけていただければギルドカードを渡します」

「解りました。もういいですよ」

「それでは勇者殿。勇者殿のご健勝を祈っておきましょう」

色々ややこしいことばかりだった。

柚木君はたぶん一回じゃ理解できないんじゃないかな？

それに弱いからギルドに入っても何も出来ないと思うし。

「こちらはギルドカードです。登録をするので左手を翳してください」

言われた通りに翳すとギルドカードが微弱に発光した。

「登録は完了しました。情報の表示は念じれば表示されます。カードに見られたくない情報があればシークレット設定をなさってください、文字の上をなぞれば出来ますので。シークレット設定の解除はもう一度なぞれば表示されます。それでは勇者様、頑張ってください。」

ギルドカードの情報を確認するために念じてみると……

名前：ユウ・タカハラ

種族：人間

称号：勇者

性別：シークレット設定中

年齢：18歳

ランク：特別ハンター

Level：18

特殊技能：『勇者』 『シークレット設定中』 『武術の心得』

『初級魔法』

シークレット設定されていたのは性別：女と『恋する乙女』だった。

恥ずかしい情報まで表示されるみたいだ。見られたら一発で解るので設定されててよかった。

ギルドの人でもシークレット設定の情報は見れないといったのでばれてないだろう。

ギルドを出ると侍女さんが待っていてくれた。

「終わりましたか？」

「はい。ばつちりです」

「そうですか。そろそろ日が落ちる時間なので戻りましょう」

確かに夕暮れ時だったし、特にすることもないので僕は城に戻ることにした。

特別ハンター（後書き）

実は侍女はかなりの実力者っていう設定はかなり使い古されてますが町に身辺警護で着いていくならそれなりに実力があるはずなのでしょう。

ギルドへの請求はギルドカードを専用の道具に通せば自動でしてくれる。

考えたのは四代目勇者だが実際に作ったのは魔法の国のモグリ魔道士

勇者の歓迎会（前書き）

主役がいなくても盛り上がるパーティ
国民はただ騒ぎたいだけ

勇者の歓迎会

城に帰った僕にクルエルさんが走ってきて今晚、急遽一般市民に勇者の存在を更に広めるために勇者披露宴を執り行うことになったと伝えられた。

急なことだったので驚いてしまったけど侍女さんが冷静に僕用の服を持ってきていたので否応無く参加することになった。

僕の為に開く宴会なので参加は決定されてみたいんだけど心の準備が出来ていない。

いきなり主役だなんていわれても困るだけだよ。それに僕の映像を大陸中に中継で送るらしい。

これも僕よりも前の世代の勇者の人たちがテレビやラジオの代わりとして考えた物だ。

うう……恥ずかしいな。でも柚木君……見てくれるかな？

「異世界より出でし勇あるものよ。よくぞ我等の世界を救うために参った。我々はそなたを歓迎しよう。あゝ、異世界から来たばかりで分らぬ事もあるだろうがそのようなことは気にせず好きに楽しむがよい！それでは皆の物、杯を持てい！……乾杯！」

王様の宣言に皆一斉に杯を掲げて一口飲む。

僕はお酒を飲むことはあまりなかったのですがすぐにほろ酔い状態になってしまっただけで今日は何故か酔わなかった。もしかしたらお酒の度が低いのかも。

広場の隅でちまちまと飲んでいたら貴族の人が話しかけてきた。

「初めまして勇者殿。主役の方がこのような隅にいるのは不自然ではありませんかな？」

「は、はあ……。あまり目立つのは苦手なんですよ」

「そうでしたか。しかし、勇者となったからには大陸中の人間全てに注目される存在になるということをお忘れなきよう」

「あ……」

そういえばそうだった。

町を歩いていた時でさえほぼ全ての人が僕を見ていた。

「おつと失礼。私はキルス・ジ・ロールと申します。以後お見知りおきを」

「僕は髙原優。名前が優で家名が髙原だよ」

「これはこれは、珍しいですな。姓名が逆になっているのはエルフや妖精ぐらいしかいないのですが」

「そうなんですか？」

「あとは勇者様から名を賜った家や、勇者様の子孫が同じように姓名が逆になっているのです」

これから僕は自分の名を名乗る度に恥ずかしい思いをしなければいけないのだろうか。

今度からは最初からユウ・タカハラで名乗ろう。

「それでは勇者様、私は綺麗な花を愛でに参ります。今宵の宴を今のうちにお楽しみください。数日もすればこのような心休まることなどなくなるかもしれないのですからね。」

「はい。……愛でに？」

「おや？聞きなれませぬかな？ふむ、歴代の勇者様風に言うならばお持ち帰り、ですかな」

紳士だとおもったらナンパな人だった。

この人僕のためのパーティで女漁りにきたのか。最悪だ。

僕が黙るとすぐに近くにいた女性の方に声をかけにいった。

「初めまして、僕はカール。君のことを教えてくれないか？レディ」
「え、ええと、初めまして？私はリリー、鍛冶屋を営んでます「リリー」、何してるんだ。早く来い」……ごめんなさい、呼ばれているので……失礼します」

速攻で失敗していた。

それでもめげずに他の人に声をかける姿を見て凄いと感心しそうになったけどよく考えたらただの軽薄な軟派だ。

クルエルさんもいろんな女性に声をかけられていて、知っている人が一人もいなくなってしまった。

暇になったので外にでて気分転換でもしようと歩いていると女の子が一人にいるのを見つけた。

僕は気になってしまったのでとりあえず声をかけてみる。

「ねえ君。何してるの？」

「ふぁいつ！？」

凄く驚かれた。いきなり過ぎたのだろうか。

「あ、勇者様。は、初めまして」

「初めまして。ね、何してるの？」

「お父様に部屋から出るなど言われてまして……こっそり抜け出したのです」

「へえ、酷いお父さんだね」

「とんでもございません！父は素晴らしい方です！」

「だったらどうして部屋から出るなんていうんだい？」

「それは……」

「？」

「私が王女だからです」

僕の周りの空気が凍った気がした。

箱入り娘ってやつだろう。

僕が王様に逢ったときもそばには女王様しかいなかった。

「あ、あのときはですね。あの時は私、部屋で中継で見てたんです」

流石に過保護だと思う。

確かに暗殺だとか誘拐だとか危険は一杯だし、護りたい気持ちも解るけど世間知らずに育ててしまつては駄目だ。

「あの……勇者様」

「なにかな？」

「私、勇者様のお話が聞きたいです」

「僕の？」

「はい。歴代の勇者様は一人を除いて素晴らしい方だったと聞きます。それで勇者様はどんな方か知りたいのです」

「ユウで良いよ王女様」

「それでは私のことはメルルとお呼びください」

「解りましたメルル王女」

「今この場には2人だけなのですよ？呼び捨てにしてください！」

「ですが」

「駄目です！」

「解りましたよ、メルル。それで、どんな話が聞きたいんですか？」

「何でも構いません」

困ったな。歴史の話なんて女の子にはつまらないだろうし……
そうだ。彼の話しよう。これだったら僕は何時間でも話し続けられるぞ。

僕が知る限りの彼のことを懇切丁寧に教えてあげたら苦笑いされてしまった。

「柚木さんのことが好きなんですネ。大丈夫です。フォーस्टッドでは同性結婚が認められております」

「け、結婚なんて……。それに柚木が僕のことどう思ってるかなんて解らないし……」

「あ……そういえばその柚木さんにはどうやって逢うのですか？」
「この世界に来てるらしいんだ。僕は彼を探しにこの世界に来たつもりだったから」

「？ですが異世界から勇者様以外の方が来たなんてことはダイアⅡマグナでは過去一度も……」

「え？」

「え？」

過去一度もなかった？

だったらどうして王様は柚木君を探してくれるなんていったんだ。

「それはおそらくですがユウさんのスキルで会わなければならない人を直感で見つけたんだろうとも思ったのでは？」

「そんな……」

思わぬところで彼と逢えない可能性が高くなってきてしまった。
でも、前例がないだけでありえないわけではない筈だ。
諦める訳にはいかない。

「あ、もうこんな時間……ユウさん。そろそろお戻りになられたほうがいいですよ」

「うん。……そうするよ」

「元気を出してください。ユウさんはこれから大変なことが待ち受けているのですから」

そういつてメルルは足早、だけどこっそりと城内に戻っていった。

そうだね。あきらめたらそこで終わりだって彼も言ってたしね。

姓名が逆の中西柚木なんてすぐに見つかると思う。

そう信じよう。今の僕にはそれしかない。

宴も終わり、夜が明ける……

勇者の歓迎会（後書き）

同性愛は認められております。

ちなみに自然の国では認められてません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8728x/>

（仮タイトル）すらいむ?に転生

2011年12月2日07時48分発行